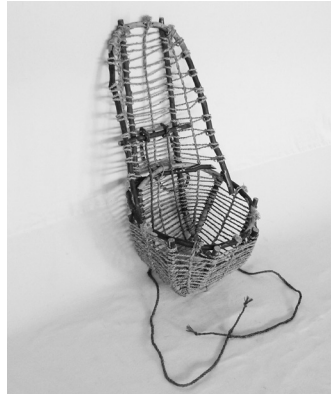


一関市民俗資料調査報告書



令和4年3月
一関市教育委員会

序

西に奥羽山脈がそびえ、東に北上山地の高原部が広がり、その中央に北上川が流れる豊かな自然に囲まれた一関市域は、自然の恵みを活かした暮らしを営んできました。昭和期中頃までは、周囲にある植物や藁で道具を作り、また鍛冶屋や大工に道具の製作を頼み、補修しながら使う無駄のない生活でした。そのような道具も機械化によって使用されなくなりますが、昭和50年代以降、自分たちが使ってきた道具を大切に思う人々がそれぞれの自治体へ寄贈する動きが起こり、現在の一関市には多くの道具が保管されています。

過去の生活の道具は、地域の日常の歴史を目に見える形で後世に伝える貴重な資料です。現在は途絶えた技術で作られている道具もあり、一度失われると再び作ることはできない物もあります。

栗駒山（須川岳）

室根山

北上川

このたび、一関市教育委員会が所蔵する生活の道具である民俗資料の調査をもとに報告書にまとめました。市民のみなさまから寄せられた資料を公開することにより、地域の歴史への理解が深まること、また資料が次の世代に引き継がれることを切に願うものであります。

令和4年3月

一関市教育委員会

教育長 小菅 正晴

目次

序	①はばき	24	(4) 地域の職人が作った道具	39	(6) 当地方において特徴的な道具	65
目次	②下駄	25	③鋏、風呂鋏、備中鋏	39	⑥0 剝(く)り物、曲げ物	65
例言	③嬰兒籠(えじこ)	25	④鎌	40	⑥1 油締、油搾	66
	④ほうき	26	⑤土入れ	41	⑥2 川舟	66
	⑤まぶし折り機	26	⑥馬鋏(まぐわ)	42	⑥3 おしらさま	66
	⑥まぶし	27	⑦田杵	43		
1 磐井地方の暮らし	⑦蚕箔	28	⑧揚水機	43		
調査の経緯と掲載資料	⑧蚕網	28	⑨田舟	44	3 データ編	67
(1) 昭和30年頃の農家	⑨真綿杵	29	⑩田下駄	44	(1) 掲載資料一覧	68
(2) 一年の農家の仕事道具	⑩機織り機	30	⑪唐箕(とうみ)	45	(2) 教科書との対応	82
① 巖美町Aさん	⑪苧桶(おぼけ)	30	⑫木摺臼(きずるす)	47		
② 弥栄Bさん	⑫糸杵	30	⑬土摺臼(どずるす)	48		
③ 藤沢町大籠Cさん	⑬糸車	31	⑭麦打ち台	48	参考文献	
④ 大東町鳥海Dさん	⑭籠	32	⑮糧切り	49		
	⑮スキー、そり、下駄スケート、かんじき、 金かんじき	33	⑯自在鉤	50		
			⑰臼、たて杵、横杵、石臼	51		
2 暮らしの道具	(2) 職人が家に来て作った道具	34	(5) マチ(町)やイチ(市)で 買って来た道具	53		
(1) 自分たちで作った道具、作る道具	⑲苗籠	34	⑱千歯抜き	53		
① 背負もっこ、背負はしご	⑲桑籠	35	⑳犁	54		
② えぶり	⑲蚕籠	35	㉑除草機・田打車	56		
③ 振り打ち・唐竿	⑲筥(うけ)、びく	35	㉒箕(み)	57		
④ 藁打ち槌	⑲すいのう、笊	36	㉓足踏脱穀機	58		
⑤ 藁しごき	⑲木櫃	37	㉔桑扱き、桑切り包丁、桑切り機	59		
⑥ 俵編み機、菰編み機	(3) 遠くから売りに来た道具	38	㉕毛羽取り機	60		
⑦ 筵織み機	⑳膳、椀	38	㉖座繰	60		
⑧ 蓑、背中あて			㉗カルトン	61		
⑨ 菅笠			㉘煙草のし	62		
⑩ 雪靴			㉙縦鋸、横鋸	62		
			㉚炭火アイロン、こて	63		

例言

1. 本書は、一関市教育委員会が令和3年度までに行った民俗資料の調査報告書である。
2. 報告書の作成は、市内の民俗資料を整理、データ化することで、資料を公開し、後世に伝えることを目的とした。
3. 作成主体は、一関市教育委員会である。
4. 報告書作成体制は以下のとおり。

教育委員会	文化財課	課長	千葉 浩
		文化財係長	金野 修
		主任学芸員	菅原 孝明
		文化財調査研究員	東 資子
		会計年度任用職員	菅原 友明
5. 民俗資料の調査期間は、平成24年4月1日から令和4年1月31日である。
6. 本書の作成は文化財課が行い、編集等は東が行った。
7. 名称等は、当地方で使われているものをすべて表記し、統一はしていない。また全国で標準的な名称に合わせていない。道具の標準的な名称は〔 〕で記した。
8. 写真は、提供を受けたものはその出典を示した。それ以外の一関市教育委員会が撮影したものである。資料写真には、資料番号が入っているものもある。
9. 市内の多くの方に話を伺い、ご協力いただいた。厚く感謝の意を表す。

1 磐井地方の暮らし

調査の経緯と掲載資料

一関市内には市民から寄贈を受けた生活の道具などの資料が各地に保存されていました。多くは昭和50、60年代頃に寄贈されており、その当時の記録がなく、道具の名前ははじめ使用地や使い方もわからない物もありましたが、平成24、25年に整理し、写真撮影、リスト化を行いました。

それらの中から、自然の植物を利用して自分たちで道具を作るなどしていた昭和30年代の暮らしに焦点をあて、当時使っていた、またその頃の普通の農家にあった道具を紹介することにしました。現在は全国で流通する物を町などで購入するのが当たり前ですが、当時は異なっていたことがわかるように道具の入手方法別に構成しました。

道具について年配者に話を伺うなどしてこの地方での名称や使い方の調査を続けていますが、まだ十分なことはわかっていません。今回、報告書として公開することによってさらなる情報が寄せられることを期待しています。

なお、資料の一部は平成30年に大東町渋民に開館した一関市民俗資料館に常設展示していますので、実際にご覧いただけます。

1 磐井地方の暮らし

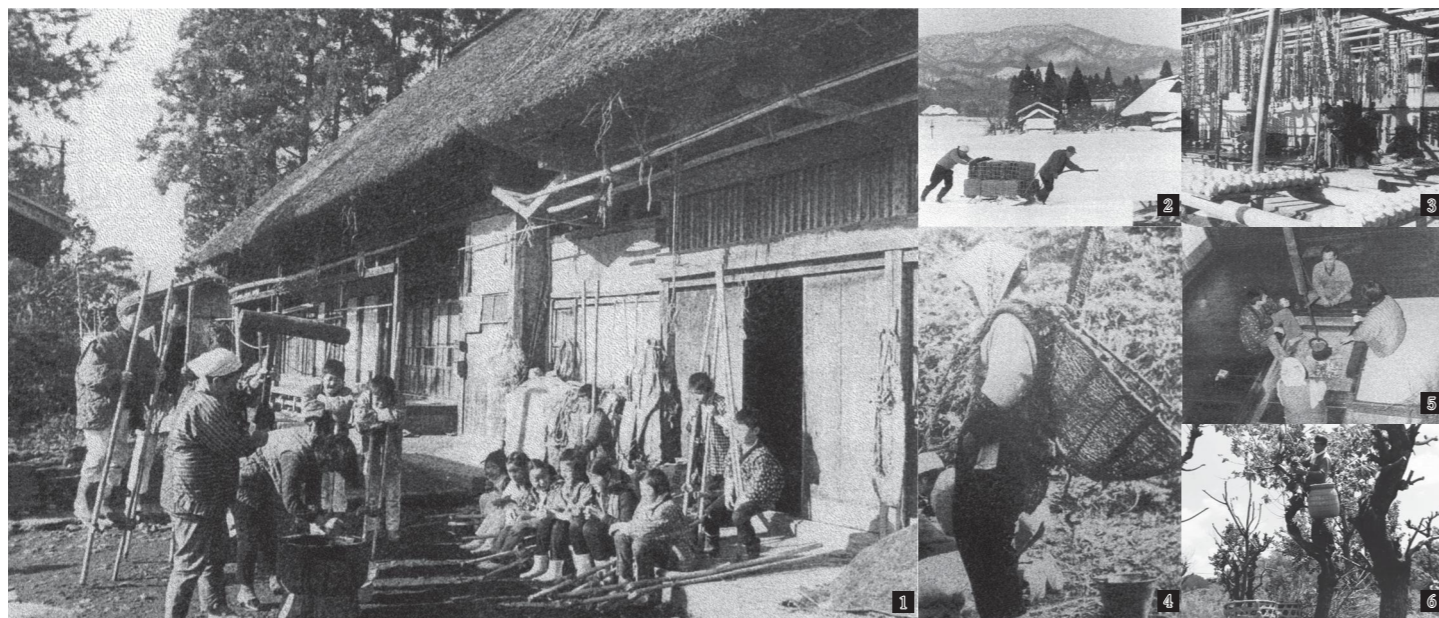
(1) 昭和30年頃の農家

昭和30年の『岩手県統計年鑑』(昭和32年発行)によれば、その年の一関市域(一関市、西磐井郡花泉町・金沢村、東磐井郡)の労働者総数83,917人のうちの70%が農業従事者です。ほか、卸売・小売、サービス業がそれぞれ7%、製造業4%などであり、多くの人が農業にたずさわっていたのです。

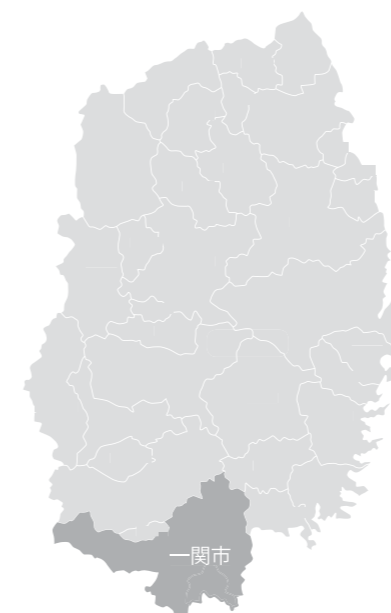
それらの農家が作っていた作物は、米(水稲)とともに、大豆、馬鈴薯、小麦、小豆などであり、また、たばこ栽培、牛飼育、養蚕に携わる農家も多くありました(表1参照)。稲作だけでなく畑作、そしてたばこ栽培や養蚕などさまざまな作物を作り、年配者から子供までの家族全員で仕事に携わり、生計をたてていました。

表1 現在の一関市域の農家数 (『岩手県統計年鑑』(昭和30年))

項目 当時の地域名	総世帯数	総農家数	主要農作物等の農家数									
			水稲農家数	大豆農家数	馬鈴薯農家数	小麦農家数	小豆農家数	大麦農家数	甘藷農家数	たばこ作付農家数	牛飼養実農家数	養蚕飼育実戸数
一関市	10,265	4,596	4,358	4,188	4,120	3,989	3,938	3,328	2,118	1,567	1,018	598
花泉町	3,260	2,398	2,237	2,317	2,260	2,238	2,113	1,467	1,607	734	197	562
金沢村	553	424	382	420	406	406	413	353	311	122	202	87
東磐井郡	14,961	12,539	9,988	11,066	10,998	10,887	10,656	10,715	8,666	7,553	5,694	5,047
合計	29,039	19,957	16,965	17,991	17,784	17,520	17,120	15,863	12,702	9,976	7,111	6,294
総農家数に対する割合			85%	90%	89%	88%	86%	79%	64%	50%	36%	32%



1～5『写真記録集一関の年輪2 20世紀の一関』一関プリント社 6村上護朗氏撮影



地図1 岩手県



地図2 一関市

(2)一年の農家の仕事道具

農家は、四季の自然の変化に応じて一年の仕事を組立てていました。

一関市域のうち、奥羽山脈のふもとの巖美町、北上川沿いの平野部である弥栄地区、北上山地の南端の高原部分大東町鳥海と藤沢町大籠の四か所のそれぞれで昭和20年代から40年代にかけて営まれていた暮らしと道具についてそれぞれ一人の方から聞いた話を表にしてみました。

※写真はイメージです。

①巖美町Aさん(昭和19年生)昭和33年頃

家族3世代8人

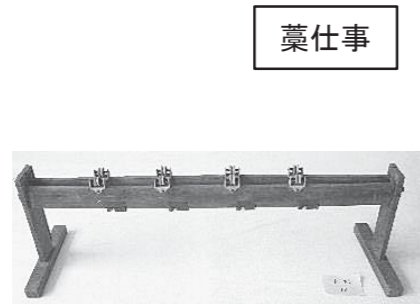
農耕馬(3頭)
繁殖馬(1頭)



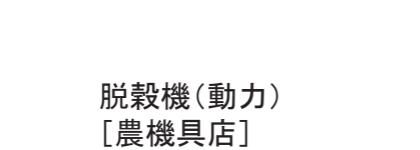
ほんによ(杉など)



み[荒物屋]



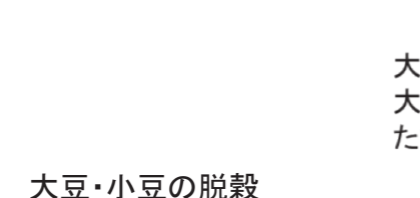
俵編機[自作・購入]



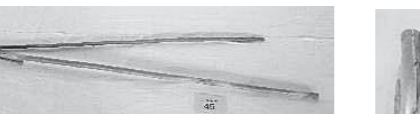
脱穀機(動力)
[農機具店]



稲刈鎌[荒物屋]



大豆・小豆の脱穀



ぱったり[自作]

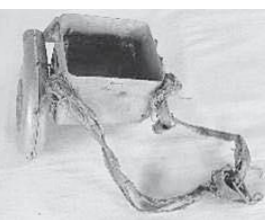
藁仕事



つつぼう[自作]



大麦・小麦・大豆・小豆
大根・ホウレンソウ・白菜
たまな・ねぎ・かぶ



散粉機[農機具店]



除草機[荒物屋]

②弥栄Bさん(昭和24年生)昭和40年頃

乳牛2頭
馬 2頭



きつつ[自家製?]



筵、ゆづけ[自家製]

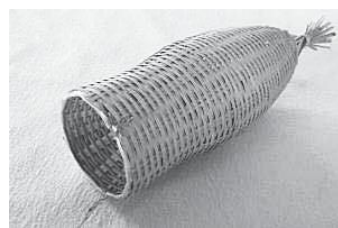


ほんぎょ
[杉、竹、間伐で作る
木材は軒に保存]



み[自家製?]

ふりうち
[自家製、柄は竹]



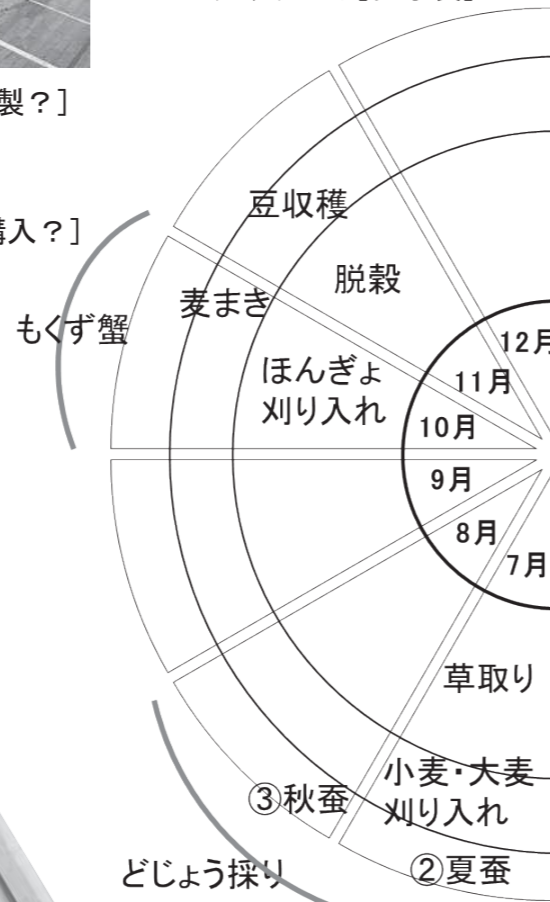
ど
[専門に作る人から買う、
薄衣の金物屋でも売っていた]



鎌
[売りに来た?]



桑切り包丁[金物屋?]



洪水用舟 軒先に吊るしておく[川崎の大工]



土入れ[自家製]



鍬
[薄衣(川崎)
の大工]



もっこ[自家製 馬にかける]



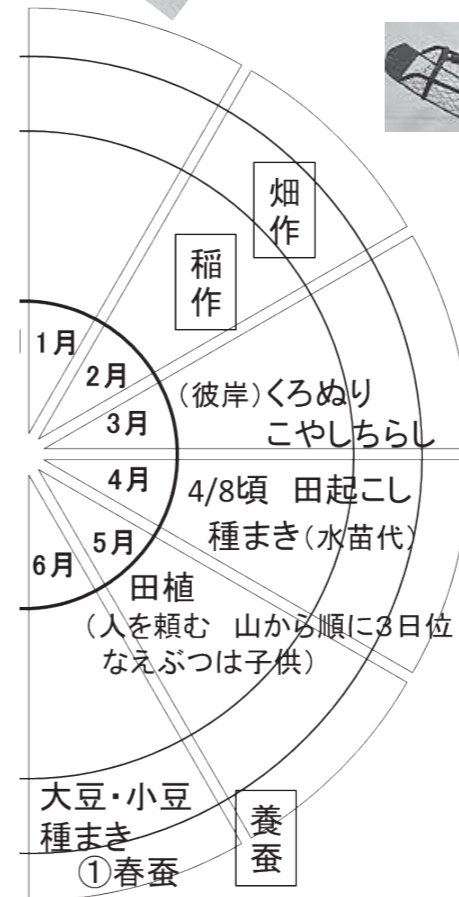
まんがん[大工?]



ばこう [農協?]



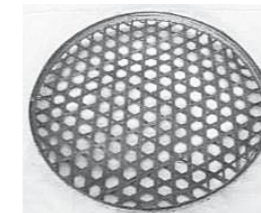
種蒔桜



蚕:東磐井養蚕組合から



養蚕の各種かご [籠屋が編みに来る]



苗かご[籠屋]



田植枠 [自家製、竹で30cm間隔]

③藤沢町大籠Cさん(昭和4年生)昭和26年頃



唐箕 [藤沢の大工の店]
(自転車で持って帰った)



こだす [自家製、あけび]



するす
[作ってもらった?]



脱穀機 [農協か]



鎌
[津谷川、藤沢の金物屋、
馬籠(本吉)の鍛冶屋]



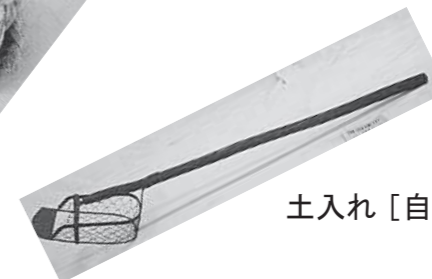
ふるうつ
[自家製、杉とナスの木]



くわ
[柄は自家製(栗の木)、
鍬先は馬籠(本吉)の鍛冶屋]



筵、ゆづけ [自家製]



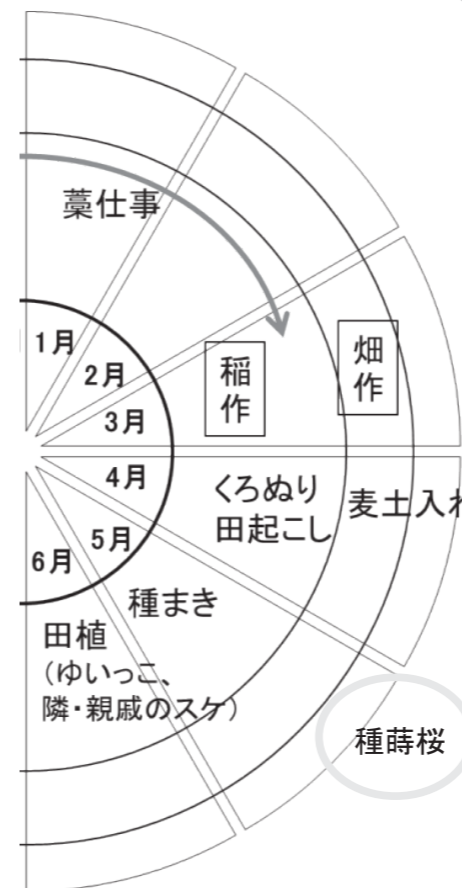
土入れ [自家製]



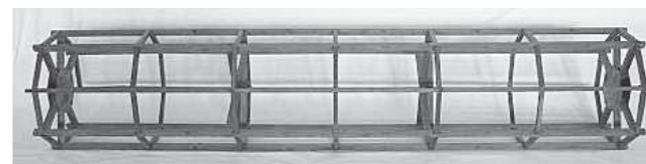
みつがん
[馬籠(宮城県本吉)の
鍛冶屋?]



ばこう [農協?]



たばこは甘酒
[麴は津谷川(室根)の麴屋]



田植枠 [地域の大工]
(ブラク共有、みなで回すので半月以上かかる)



しろかち [農協(大籠)]

大工は大籠に2人

④大東町鳥海Dさん(昭和7年生)昭和20年頃

家族 3世帯4人
馬 1頭

唐箕 [鳥海の唐箕大工]
するす [するす大工]
きつつ [大原の車大工] 共同で管理
てびき [摺沢の金物屋]
水車
脱穀機 [千厩の金物屋?]
はさ 杭(栗)、長木(竹など)
ふりうち [自家製、じさの木と竹]
まんばん(麦打ち) [自家製?]
鎌 [金物屋、鍛冶屋]

作業唄

12月 山の木切り (薪用 ナラ・栗)
11月 脱穀
10月 はせかけ
9月 刈り入れ (彼岸)
8月 麦刈り
7月 草取り
6月 麦種まき
5月 種まき (水苗代)
4月 田起こし しろぬり 代掻き
3月 麦踏み
2月 稲作
1月 麦まき 豆収穫

小笠原流作法、喜多流謡曲(道場)

籾織り
ゆずけ
土入れ [網:金物屋、柄:自家製]
ばこう [農機具屋?父の代]
つきやば池
まんが [鍛冶屋]
種蒔桜
鍬 みつがん よつがん [鍛冶屋(地区内)]
えんぶり [自家製?]
せん引き [自家製]
こびる 夜はどぶろく
苗かご [籠屋が編みに来る]

12月 麦踏み
11月 稲作
10月 畑作
9月 麦踏み
8月 麦踏み
7月 麦踏み
6月 麦踏み
5月 稲作
4月 稲作
3月 稲作
2月 稲作
1月 稲作

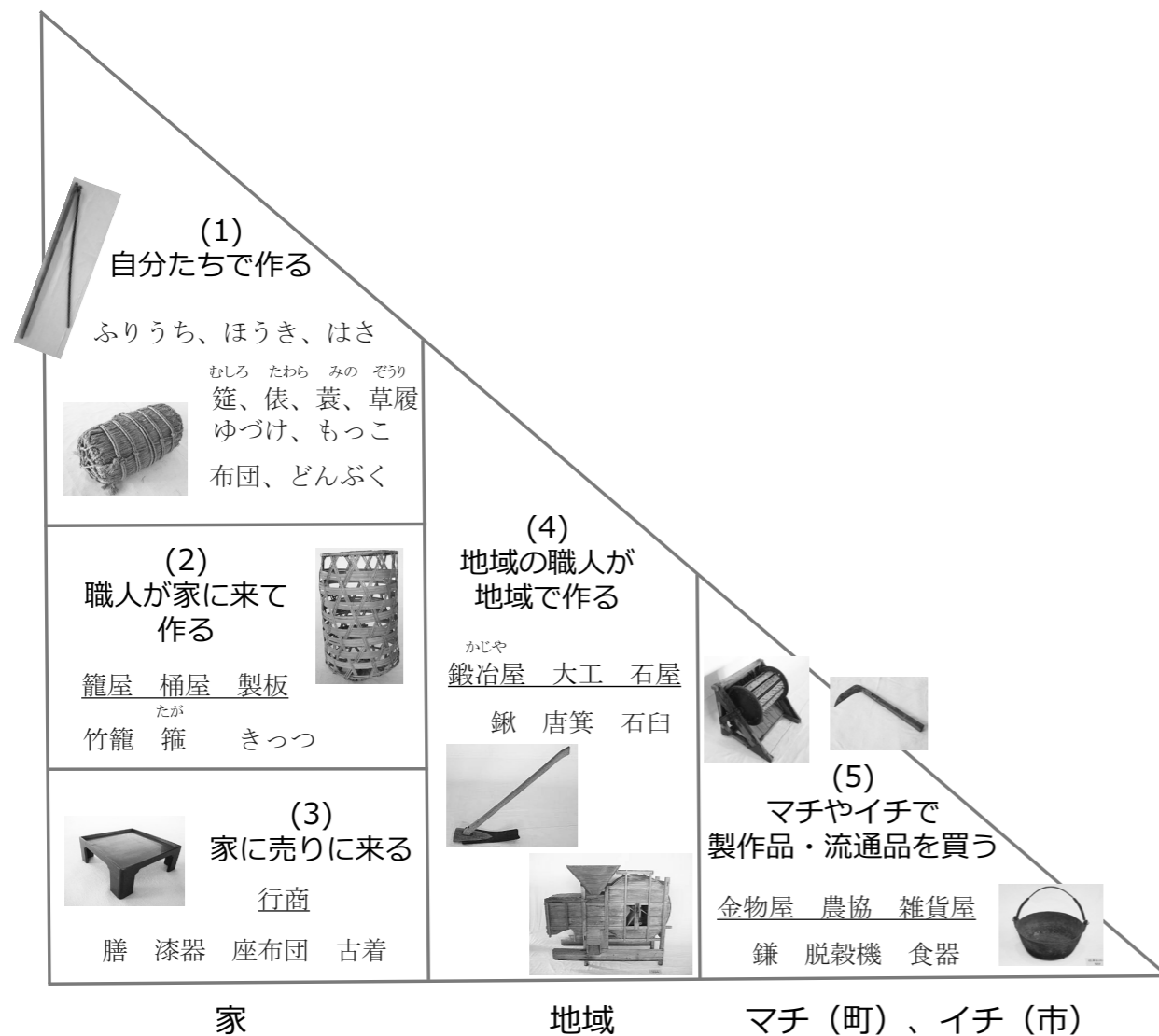
2 暮らしの道具

2 暮らしの道具

昭和30年代頃の農家にある道具は、(1)自分たちで作った物、(2)職人が家に来て作った物、(3)遠くから行商人が売りに来た物、(4)地域の職人が作った物、(5)マチ(町)やイチ(市)で製作品や流通品を買ってきた物、でした。特に(2)や(3)は、現在はあまりみられない道具の入手方法です。

自分たちで作ったり、地域の職人たちが作ったりする物は、地元の植物などを利用して、みながそれぞれに作っていますが、同じような物が作られており、当地方の特徴が表れています。一方、流通品も多く入ってきており、明治・大正期から日本各地で作られた最先端の農具などが当地方でも使われていたことがわかります。

図1 昭和30年代頃の農家の道具の入手方法



(1) 自分たちで作った道具、作る道具

※ []は標準名、以降は当地方のみでの名称(以下同様)

① 【背負もっこ】 もっこ、しよいもっこ 【背負はしご】 しよいこ、しよいかぎ

春先や夏に堆肥にするための馬の糞や草を入れて背中に背負って田や畑に運ぶ。じさの木(エゴノキ)などを丸く輪にして乾かして枠を作り、藁縄などで網を編んだ。

しよいこは荷を背負う時に使う。杉で梯子を作り、縄を編む。



①-1



①-2



①-3



①-4



①-5



①-6

② 【えぶり】 えんぶり、押し板、ならし、しろならし、がっくら、熊手

田をならす道具。代掻きの最後、^{しろか}苗代田のならしに使う。また、^{もみ}粃や豆などを広げるのにも使う。横板はまっすぐなもの、波状のものなどある。板と柄の取り付け部に遊びがある様子から「がっくら」と呼ぶという。杉板などで作った。



② - 1



② - 2



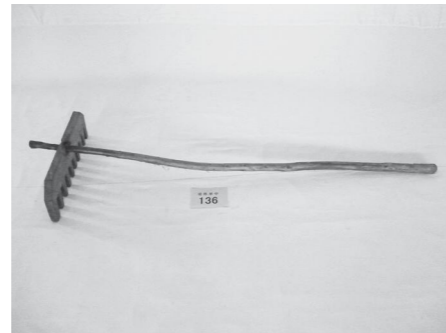
② - 3



② - 4



② - 5



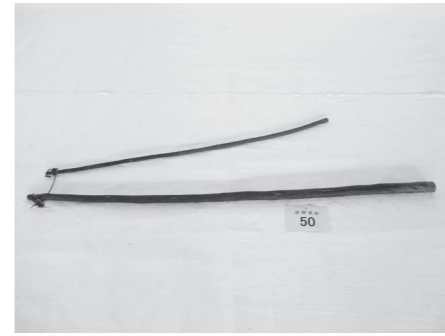
② - 6

③ 【振り打ち・唐竿】 ふりうち、ふるうち、ぱったり

柄を持って振り、打ち棒で打ち、^{もみ}粃や麦、そば、粟、大豆、小豆を脱穀した。選別は、^{とうし}篩、箕を使ったあと、残った「とつつあ」(脱穀できない残り)をふりうちで打った。

連結部は、縄でつなげたもの(③-1~3)、柄に穴をあけたり(③-4~8、12)、竹を曲げて輪を作って、軸棒を通したもの(③-9~11)がある。

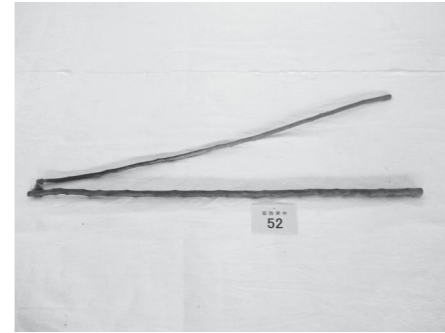
柄を竹やじさの木(エゴノキ)、みずの木など軽く持ちやすい、しなる木で作り、打ち棒をナスの木、ヤマガ(山桑)、じさの木など固い木で作る。③-11、12は打ち棒を2本つけている。



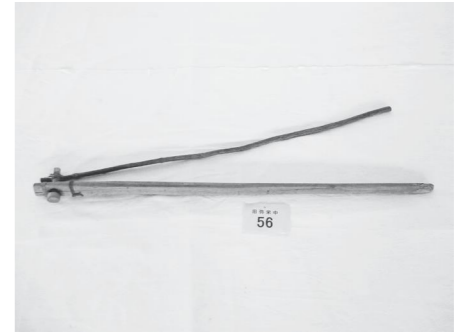
③ - 1



③ - 2



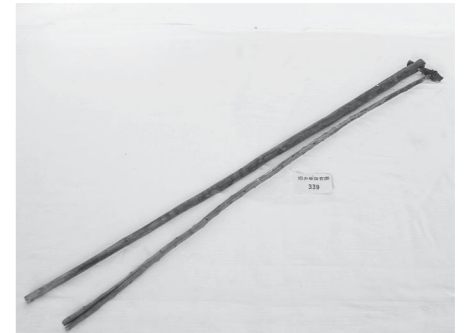
③ - 3



③ - 4



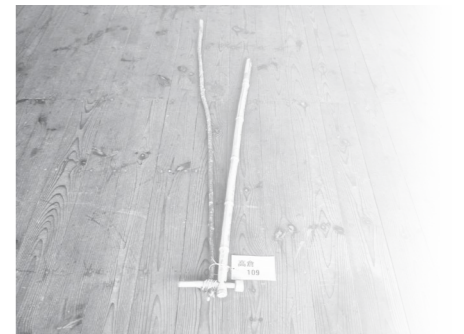
③ - 5



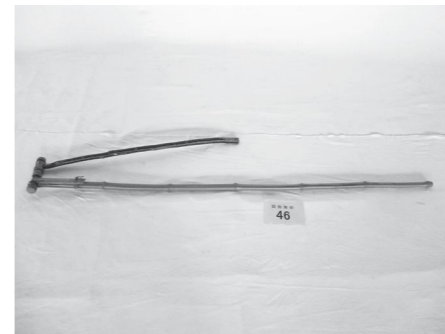
③ - 6



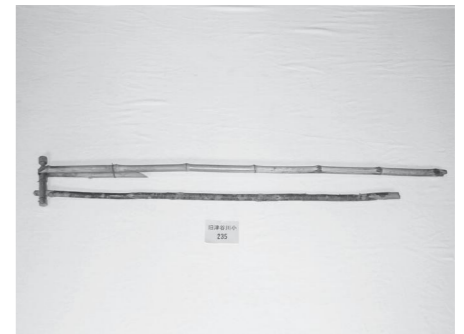
③ - 7



③ - 8



③ - 9



③ - 10



③-11



③-12

④ 【藁打ち槌】 わらぶち(藁打ち)、つづんぼう、つつぼう、つつぼ 【槌】 あお

はかまを取った稲藁を叩いて柔らかくする。少し丸みがある「わらぶち石」や木の「わらぶち台」、白をひっくり返した底で使う。ナラ、カシ、ヤマガ(山桑)、山桜などで作る。

先にあお(④-4)で叩いたという人もいれば、使わなかったという人もいる。



④-1



④-2



④-3

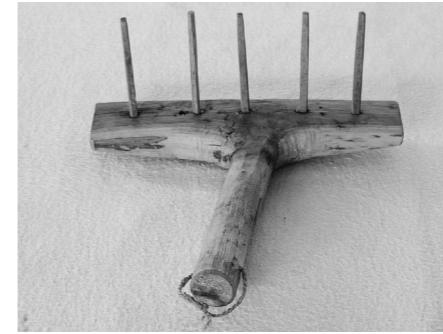


④-4

⑤ 【藁しごき】 わらすごき、ごんどしごき

稲藁のはかまを取るための道具。

木を削って釘を打つ、竹を差し込むなどして作る。



⑤-1



⑤-2

⑥ 【俵編み機、菰編み機】 たあらあみ、たわらあみ

冬に次の年の俵を作って準備したという家や、刈り入れが終わったらすぐに俵編みに取りかかったという家などがある。菰の部分こもを女性が編み、たらばしさんたわら(棧俵)⑥-6を男性が作ったともいう。

昔は縄の両端に槌の子を結び、緯糸になる藁をさして菰を編んだという⑥-1、2)。たらばしおもりを作って蓋をして昔は粳、その後玄米を4斗(72リットル、60kg)入れて出荷したという。鍾おもりはナラ、クヌギを使った。

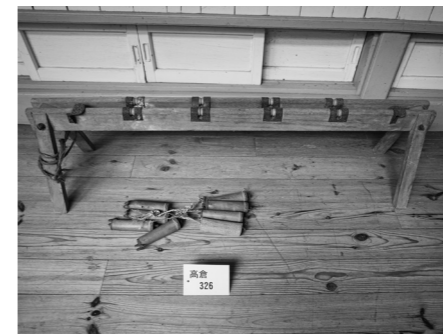
昭和30年代には俵の基準が変わり、3本の槌の子で編むようになり、またバネで留まる編み機で編んだ⑥-3、4)。昭和30年代後半に麻袋、その後紙袋になる。台は簡単に作れるが「びんちょう」などというばねの部分は購入した。



⑥-1



⑥-2



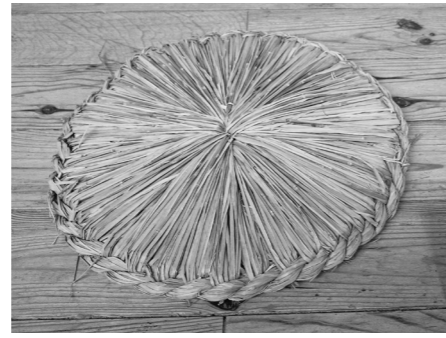
⑥-3



⑥-4



⑥-5



⑥-6

⑦ 【^{むしろ}筵編み機】 むっしょあみ

冬仕事で次の年に使うむしろを織った。

筵の織り機(⑦-4)を持つ家は専門に織って近隣などに売っていた。



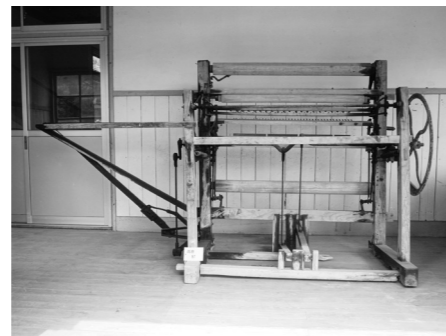
⑦-1



⑦-2



⑦-3



⑦-4

⑧ 【^{まの}蓑、背中あて】 みの けら

農作業や雨具、日よけなどに使用する。稲藁やスゲ、マダ(シナ)、クゴなどで作った。マダは珍しいので山で見つけると遠くからでも持って帰ったという。水に漬けておき、皮をはぎ、乾燥させて使った。

地域によって「みの」と「けら」の呼び分け方が異なる。はげら、とばけら(羽の飾りつき)とねこげら(飾りなし)と言い分けたり、背中あてを「けら」「ねこげら」といったりする。背中あては物を背負う時に直接背中にあたらないために使ったり、日よけ、雨よけ、雪よけにもする。

はだけら、とばけら、せごも(⑧-7、8、9)は夏に日焼けを防ぐためなどにつけ、直接肌に当てるので柔らかいイグサで作った。専門で作る人が売り歩いたともいう。

着ごぎは(⑧-10)、イグサで編んだごぎを頭からかぶる、子供は雨の日に学校に行くのに使う。
腰みの(⑧-11、12)は、腰に巻き、農作業の泥除けにした。稲藁やスゲ、ホンダワラ(海藻)などで作った。



⑧-1



⑧-2



⑧-3



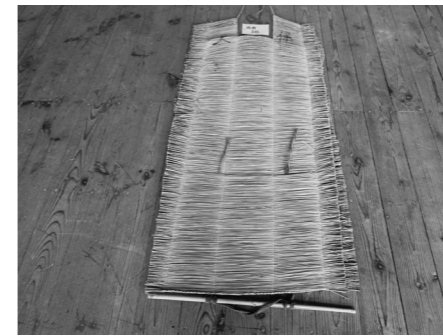
⑧-4



⑧-5



⑧-6



⑧-7



⑧-8



⑧-9



⑧-10



⑧-11



⑧-12

⑨ **【菅笠】 すげかさ、かさ**

農作業で日除けのため、また雨や雪を除けるためにかぶった。スゲ、稲藁、イグサなどで作った。宮城県の金成や若柳(いずれも栗原市)で作られたものを購入したともいう。



⑨-1



⑨-2

⑩ **【雪靴】 ゆぎぐつ ゆづけ、つまご、つまかけ**

雪の日に近くを歩くために履く。昭和20年代頃からゴム草履、下駄、タン靴(ゴム靴)、ゴム長靴などが普及し始めるが、多くの人が履くようになるのは昭和40年頃からである。藁製の雪靴は草鞋や草履よりも遅くまで使われた。

雪靴は型(⑩-8)を入れて編んだ。

雪踏み用の簡単な靴「いっば藁」は、一束の藁で作られ、使い捨てにした。



⑩-1



⑩-2



⑩-3



⑩-4



⑩-5



⑩-6



⑩-7



⑩-8

⑪ 【はばき】

農作業などで脛に当てる。藁、マダ、藤の皮、布などで編む。はばき織り機(⑪-5、6)もあった。



⑪ - 1



⑪ - 2



⑪ - 3



⑪ - 4



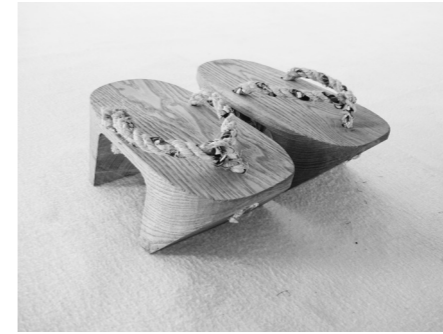
⑪ - 5



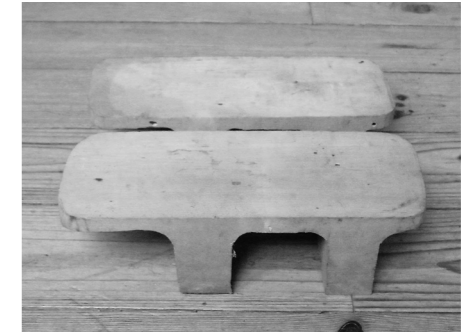
⑪ - 6

⑫ 【下駄】

巖美地域では炭焼きの副業にクリの木で作った。大東地域では冬にホウノキで作って売ったという。キリの下駄は町の店で買った。⑫-2は製作途中か。



⑫ - 1



⑫ - 2

⑬ 【^{えじこ} 嬰兒籠】 えんつこ、えずこ、いじこ

赤ちゃんを入れた。田植えなどの忙しい時期には外にも持ち出された。

藁縄を編んで作る。下の部分は座布団を作るのと同じだが、立ち上げる部分には技術が必要なので専門に作って売る人もいた。

子供が顔を出しても痛くないように縁に布を貼ったものもある。底は空いており、藁や籾殻、ぼろ布を入れて尿などを吸うようにし、おしめの役割もした。



⑬ - 1



⑬ - 2



⑬ - 3



⑬ - 4

⑭ 【ほうき】

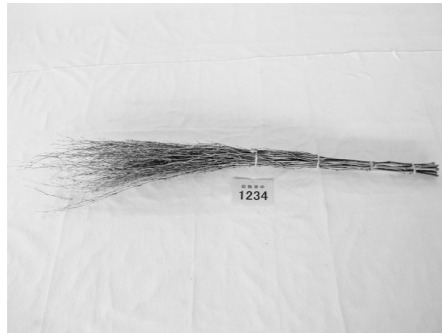
庭や土間などを掃くほうきは身近に手にはいる木などで作り、それらを「ほうき木」といった。大東では地区によって笹竹、じさの木(エゴノキ)、コキアをそれぞれを「ほうき木」「ほうき草」といった。タカキビを束ねて使うこともあった。庭ほうきはモウソウチクの枝、じさの木や熊笹などで作る。流通品の座敷ほうきは荒物屋で買う。



⑭ - 1



⑭ - 2



⑭ - 3



⑭ - 4



⑭ - 5

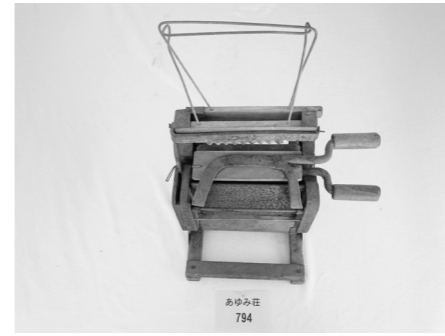


⑭ - 6

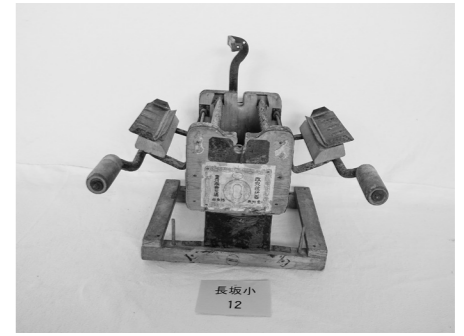
⑮ 【まぶし折り機】

蚕が繭をつくるための部屋であるまぶしを作る。明治末に二角式まぶし折機(⑮-1、2)が発明され、量産できるようになった。藁を差しハンドルを回し、交互に折り曲げる。

その後、改良されたまぶし折り機(⑮-3、4)になる。



⑮ - 1



⑮ - 2



⑮ - 3



⑮ - 4

⑯ 【まぶし】

昔はハギなどの木の枝をそのまま使ったり、藁縄に藁を差し込んだり藁を手で折ったりして作ったが(⑯-1、2)、二角式まぶし折機で折って量産できるようになる(⑯-3、4)。

昭和30年代はまぶし折り機で織り、再利用できるようになる(⑯-5、6)。さらに折りたためて再利用可能な紙製の「回転まぶし」を購入するようになっていく。



⑯ - 1



⑯ - 2



⑯ - 3



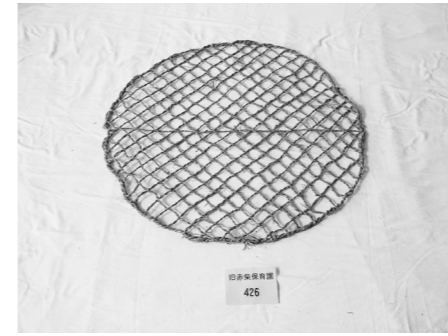
⑯ - 4



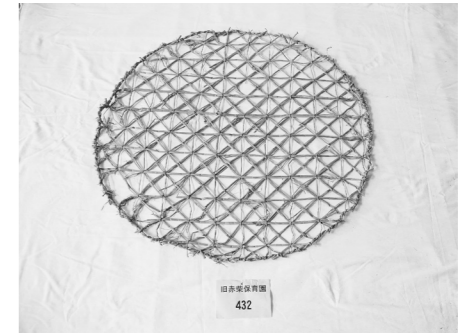
⑩ - 5



⑩ - 6



⑩ - 3



⑩ - 4

⑪ さんぼく 【蚕箔】 わらだ、かいこ籠

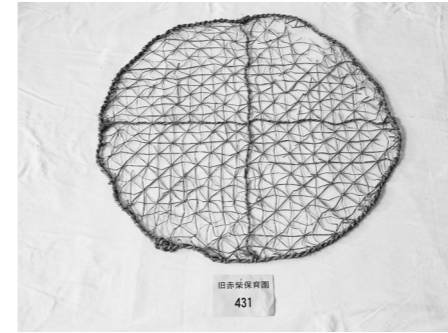
蚕を入れる籠。藁で編む。



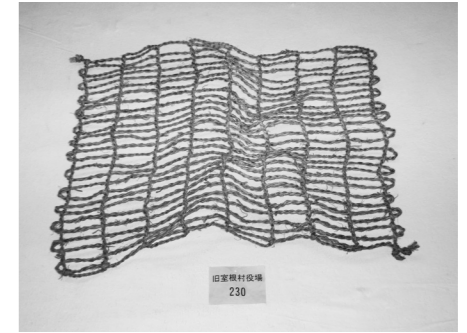
⑪ - 1



⑪ - 2



⑩ - 5

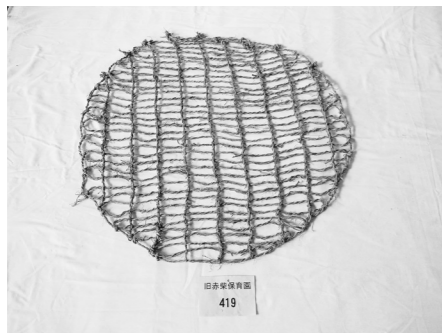


⑩ - 6

⑫ 【蚕網】 あみ

蚕籠の上に敷き紙を敷き、蚕を入れ、網をかけて桑の葉を置く。持ち上げてみんをとり、眠った蚕と分けるなどに使う。

藁やスゲなどで作る。



⑫ - 1



⑫ - 2

⑬ 【真綿枠】 まわたかけ、わたわく

2頭の蚕が一つの繭まゆを作った玉繭や、不良品のくず繭など出荷できない繭を利用し、煮て柔らかくし、水を張ったたらいの中で引きのばして枠木にかけ、真綿を作った。

布団やどんぶく(綿入れ、布団として寝られる着物)、むずりはだこ、つんぬき、などを作った。



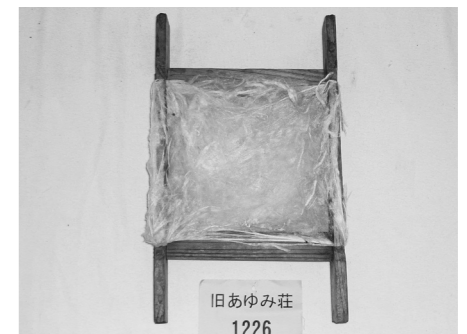
⑬ - 1



⑬ - 2



⑬ - 3

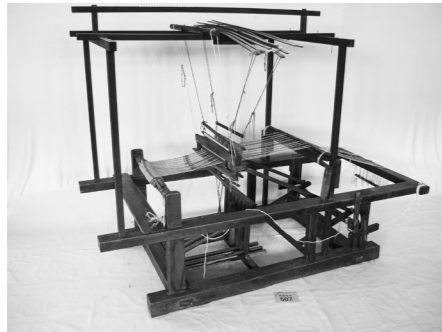


⑬ - 4

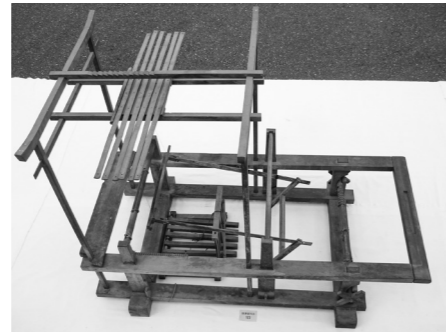
⑳ 【機織り機】

明治生まれの女性たちは家族の着物用にくず繭から紬糸を作り、生地を織って自分たちの着物を作っていたというが、それ以降は使う人は少ない。端切れを織る「かまばた織(裂き織り)」もなされた。

昭和30年代には各家に機織り機はそのままに置かれており、おばあさんがベッドにしたという家もあった。機織り機は桜材で作られている。



⑳ - 1



⑳ - 2

㉑ 【苧桶おぼけ】

大麻、苧麻(カラムシ)を績み(手で細く割き、撚り合わせる)、糸にしてためる籠。くず繭も入れたという。



㉑ - 1



㉑ - 2

㉒ 【糸枠 わく、けさ、がわ】

うしくび、座繰機などにつけ、糸を巻き付ける。木製の枠は業者などから仕入れた。籠状の枠は、マガリダケで籠屋が編んだ。



㉒ - 1



㉒ - 2



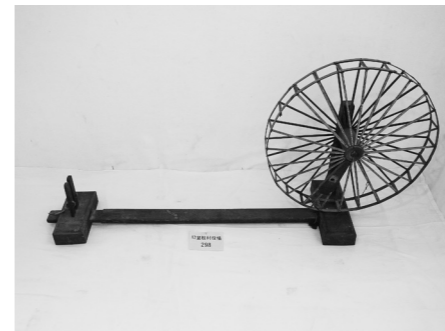
㉒ - 3



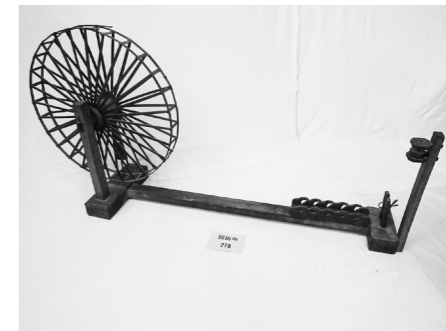
㉒ - 4

㉓ 【糸車】

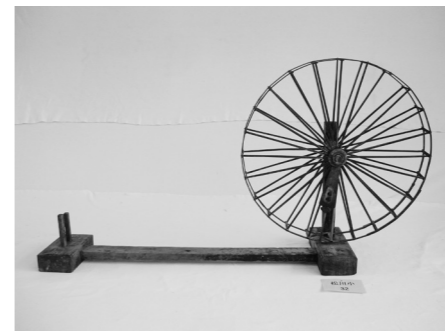
紡錘と車を紐でつなぎ、取っ手を回して車を回転させて撚りをかけて糸を巻き取る。麻糸、絹糸を巻き取ることに使われた。



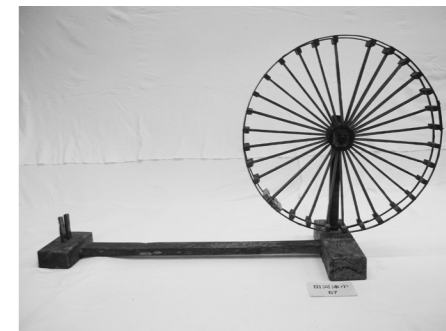
㉓ - 1



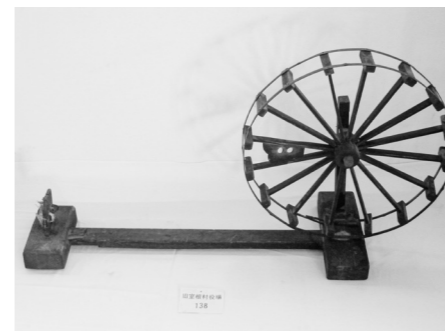
㉓ - 2



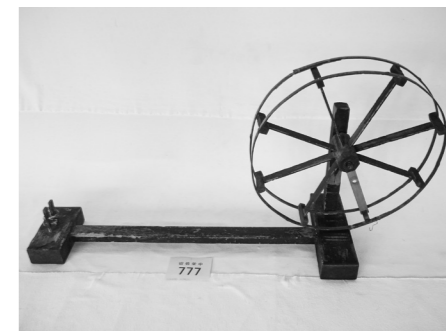
㉓ - 3



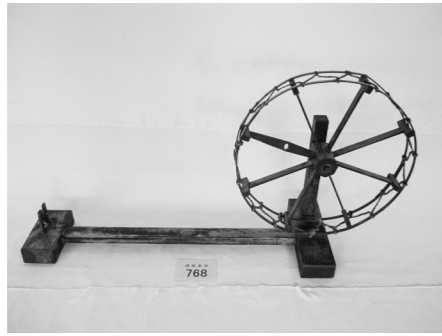
㉓ - 4



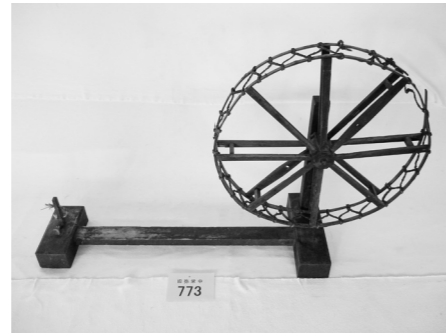
㉓ - 5



㉓ - 6



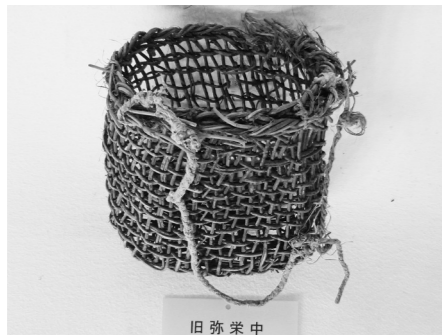
㉓-7



㉓-8

㉔ 【籠】 コダシ、コダス、ふご

山仕事や山菜採り、栗拾い、キノコ採りに腰にさげる。
アケビのつる、フジのつる、クゾフジ(葛)、桜の木の皮で作る。



㉔-1



㉔-2



㉔-3



㉔-4



㉔-5



㉔-6

㉕ 【スキー、そり、下駄スケート、かんじき、金かんじき】 じかんじき

スキーやそりの下部は木目が細かくすべりがいい山桜、ハナツラなどで作る。その上部はクリとスギなど。下駄スケートの金具は鍛冶屋で作ってもらうが、割竹でもすべる。じかんじき(㉕-8)は鍛冶屋で作ってもらい長靴につけた。

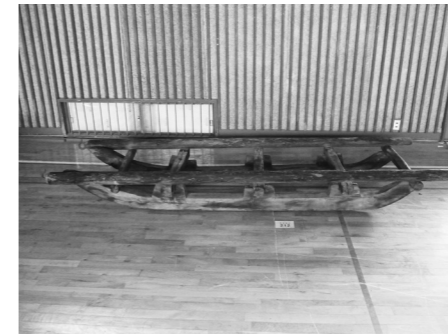
かんじきは雪の多い地域では必需品だった。自分の足に合わせてマキの木をフジで留め、爪にチジミイタヤ、紐に牛皮を使うなどして頑丈に作った。㉕-7はビニール紐を使っている。かんじきの形は、その地域の雪質によって異なっている。



㉕-1



㉕-2



㉕-3



㉕-4



㉕-5



㉕-6



㉕-7



㉕-8

(2)職人が家に来て作った道具

かご
籠屋

各地に「籠屋」「笊づくり」などといわれる竹細工の職人がおり、家に来てその家で必要な籠などを作ってくれました。泊まりこんで作ることもありましたが、職人は摺沢などの町で店を開いている人もいましたが、多くは農作業のあいまに作る職人でした。昭和50年代までは各地にいたといいます。竹細工には、山や家の裏にはえる自生のシノダケ(マダケ)などを使いました。

せいはん・せいばん(製板)

発動機を持って家に来て木材を製材してくれる移動の製板の職人がいました。家を建てる時は、山で木材を伐り出してため置いた「とば」で製板し、そこから木材を運びました。

おけ
桶屋

たが
籠の修理に回ってくる桶屋もいました。

⑫⑥ 【苗籠】

田植えで苗を入れて運ぶ。苗は朝早くから老人たちが「苗取り」して束ねられており、それを田に投げる「なえぶち」は子どもの役割だった。田植えは「ゆいっこ」などで行い、休憩の「こびる」や夜の飲食は楽しみだった。



⑫⑥ - 1



⑫⑥ - 2

⑫⑦ 【桑籠】

蚕に与える桑を摘み、運ぶ。



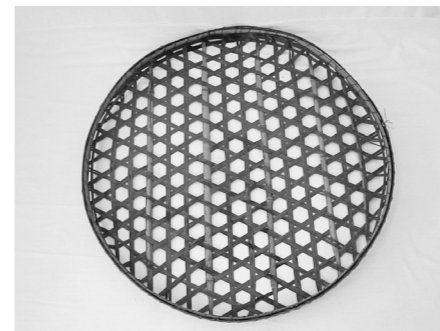
⑫⑦ - 1



⑫⑦ - 2

⑫⑧ 【蚕籠】 かご、わらだ

むしろ
上に筵や紙を敷き、蚕を入れる、まぶしを置くなどする。



⑫⑧ - 1



⑫⑧ - 2

⑫⑨ 【筌】 ど、どう、うなぎど、どんじょうど 【びく】

ウナギやドジョウを捕まえる竹筌。返しがか所あり、餌を入れて水底に仕掛ける。自家用の漁だったが、販売するために捕る人もいたといい、土用のウナギには高い値がついたという。

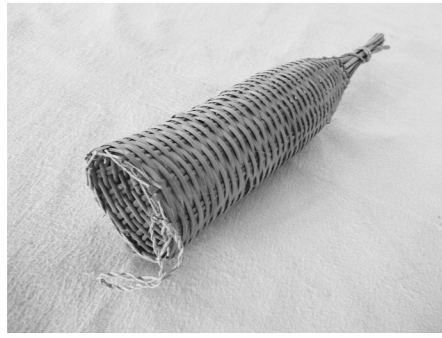
⑫⑨-5はモクスガニ用か。浮きはキリヤオソッポ(コシアブラ)を使った。



⑫⑨ - 1



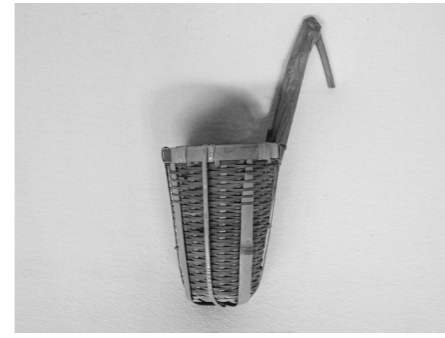
⑫⑨ - 2



⑳ - 3



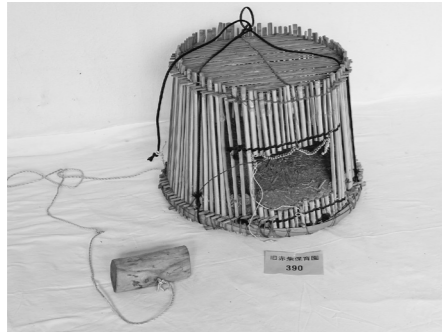
⑳ - 4



㉑ - 5



㉑ - 6



⑳ - 5



⑳ - 6



㉑ - 7



㉑ - 8

③⑩ 【すいのう】 めぎゃ、めきゃ 【箒】 ざる、のりとり、かご

めぎゃは、ご飯に混ぜる麦を炊く、大根を炊くことなどに使った。



③⑩ - 1



③⑩ - 2



③⑩ - 3



③⑩ - 4

③⑪ 【木櫃】 きつつ

粃や穀物などを入れて保存する。家のスギヤマツで作ってもらう。



③⑪ - 1



③⑪ - 2



③⑪ - 3



③⑪ - 4

(3) 遠くから売りに来た道具

塗り物の椀や膳は、特産地である秋田の川連^{かわつら}(湯沢市)から売りに来ました。座布団や古着を売りに来ることもあったといいます。

車が普及した昭和40年代以降は車で来て、その先を歩いて回る行商人が増えたともいいます。

③② 【膳】 祝いの膳 【椀】 お椀、揃いの椀

家で結婚式などの祝い事、葬式や年忌など「人寄せ」をしたので、揃いの膳や椀が必要だった。多くの家で祝儀と不祝儀用に二十人揃いで揃えていたが、足りない場合には、本家などに借りた。江戸時代の購入記録を箱に記している物もあり、大切に手入れされ、保管されていた。



③② - 1



③② - 2



③② - 3



③② - 4

(4) 地域の職人が作った道具

各地に農鍛冶や大工などがおり、依頼してその家に合わせて作ってもらったり、作ってあるものを買ったりしました。また、修理もしてもらいました。唐箕^{とうみ}、土摺臼^{どずるす}などそれぞれを専門に作る大工もいました。

③③ 【鍬、風呂鍬、備中鍬】 みづがん、みつがん、みつくわ、みづが、みづぐわ

田や畑の土を掘る、運ぶなどする。三つ鍬は、田の壁を作る「くろぬり^{あぜ}(畦塗り)」では割れ目やモグラが開けた穴をふさぐ、堆肥を入れる、などに使った。固い物も掘り返せる便利な道具だった。

さきがけ(鍬先)は鍛冶屋で修理しながら使った。三つ鍬の柄は、力が入りやすい、イタヤカエデ、ナラ、ヤマガなど硬い木で作る。平鍬は柔らかく持ちやすいスギなどでひんぱんに新しくした。

かんだい(鍬台)はかんだい屋で買い、自分で角度を合わせて鍬先に入れ、水に漬けて締めた。



③③ - 1



③③ - 2



③③ - 3



③③ - 4



③③ - 5



③③ - 6



③③ - 7



③③ - 8

③④ ^{かき} [鎌]

稲や草を刈る。昔は、草刈り鎌を稲刈りに使っていたのでけがをすることもあったという。その後、稲刈り専用の薄刃や鋸刃の鎌を使うようになった。金物屋で買ったり鍛冶屋で作ってもらったりした。研ぎながら刃が細くなるまで使った。



③④ - 1



③④ - 2



③④ - 3



③④ - 4



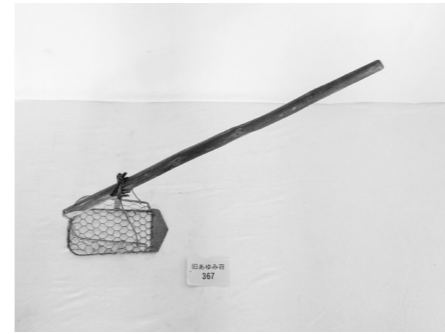
③④ - 5



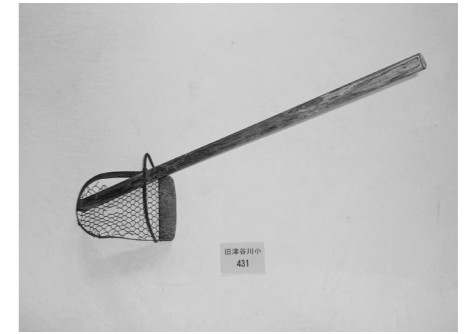
③④ - 6

③⑤ [土入れ]

土をすくい、網目からふるい落とす。雪が減り、麦が芽を出す彼岸の頃、麦踏みと土寄せを行い、その後に土を入れるために使った。網目部分は自分たちで針金で作ったり補修したりしたという。手前に引くもの(③⑤-1~4)と、奥に押すもの(③⑤-5~8)があり、畑の状態で使い分けた。



③⑤ - 1



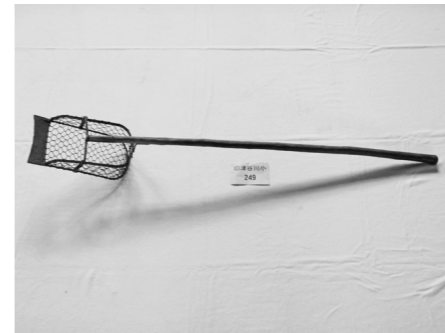
③⑤ - 2



③⑤ - 3



③⑤ - 4



③⑤ - 5



③⑤ - 6



③⑤ - 7



③⑤ - 8

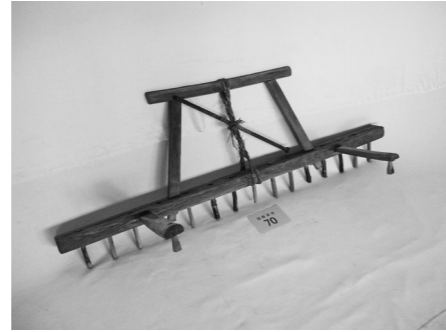
③⑥ ^{まぐわ}【馬鋤】 まんが、まんがん

「たんぶち」(田起こし)が終わった後、水を入れて耕す(代掻き)ために馬に曳かせ、土のかたまりを砕き、ならした。大工に頼んで台は水に腐りにくいクリの木などで作った。

馬を導く「させとり(口取り)」は子どもも手伝った。



③⑥ - 1



③⑥ - 2



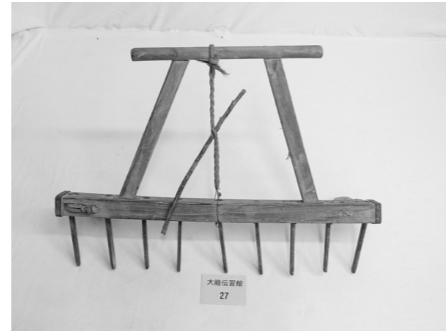
③⑥ - 3



③⑥ - 4



③⑥ - 5



③⑥ - 6



③⑥ - 7



③⑥ - 8

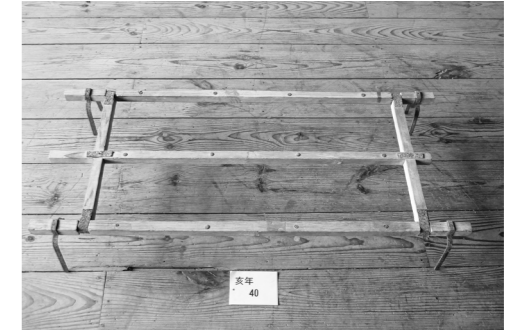
③⑦ 【田枠】 線引き、わく、型付け、田植定規

苗を植える場所の目安をつける。近所の大工に作ってもらった。藤沢町大籠では地区の共有で持っていた。乱雑植えや回り田植え(渦巻き状に植える)から、一定の面積のある田んぼに等間隔に苗を植える「正条植え」をするようになり、枠をひいて田に型をつけて縦と横の間隔をそろえた。

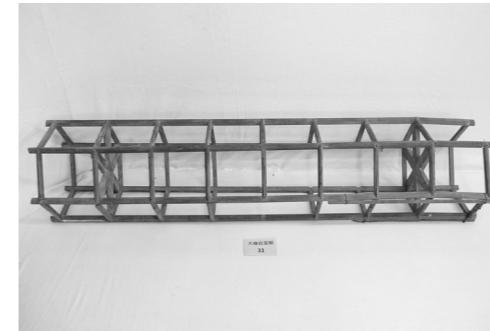
板に歯をつけた「線引き」(③⑦-1)は自分たちで作ったが、縦の目安しかつけられなかった。枠を曳くのは重要な仕事であったので、「物事がわかる人」に任せたという。



③⑦ - 1



③⑦ - 2



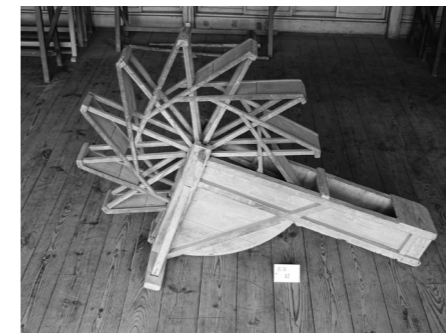
③⑦ - 3



③⑦ - 4

③⑧ 【揚水機】 蛇腹、踏み車

足で踏み動かして水面より高い場所へ水を上げる。稲は穂をつける時期に水を必要とするので水の管理に気を配った。



③⑧ - 1



③⑧ - 2

③⑨ 【田舟】 かつぎ舟、かつき舟、かりしき舟

ひどろ田(湿田)にかつぎ(刈敷、肥料用の草)などを運んだ。



③⑨ - 1



③⑨ - 2

④⑩ 【田下駄】 おおあし、うざね

ひどろ田(湿田)で代掻きやかつぎ(刈敷)を敷き踏む「ふんませ」で使う。「うざねはぐ(苦勞する)」の語源ともいわれ、大変な作業であった。

地域の大工に頼んで、軽い杉板などで作った。

昭和40年頃に農地改良によって乾田に変わり、使うことはなくなった。



④⑩ - 1



④⑩ - 2



④⑩ - 3



④⑩ - 4



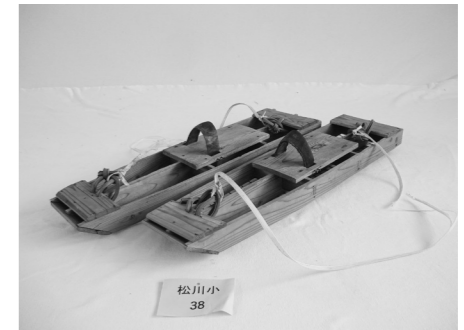
④⑩ - 5



④⑩ - 6



④⑩ - 7



④⑩ - 8

④⑪ 【唐箕】 とおみ、とおみ

ハンドルを回して風を起し、^こ糠を選別する。重い粒は選別口から落ち、ごみは外に飛ばされる。江戸時代から全国各地で作られているが、当地方のものは、芯棒の受け板が短い縦木や横木、足が多く裏表に選別口がある東日本で見られる形である。入口が一体のもの、着脱式のものがある。

円形部の作成には特別な技術が必要であり、金沢(花泉)、薄衣(川崎)、藤沢にはそれぞれ専門の「唐箕大工」がいた。杉板で作られ、軸にはクリかカシの木を使う。

④⑪-1は薄衣の「岩測式」、④⑪-9は明治37年に金沢の菅生氏が作ったもの。④⑪-14はサシナミ式(愛知県)、④⑪-16は安野農具製作所(愛媛県)製。



④⑪ - 1



④⑪ - 2



④1 - 3



④1 - 4



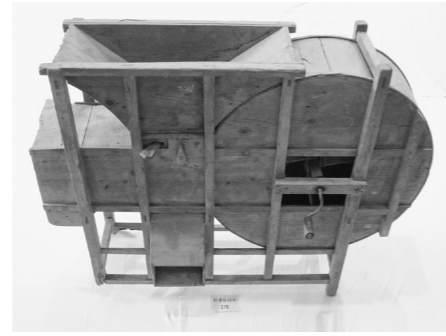
④1 - 13



④1 - 14



④1 - 5



④1 - 6



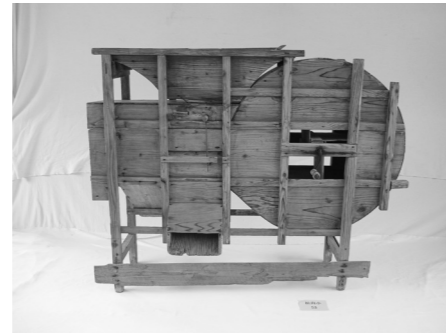
④1 - 15



④1 - 16



④1 - 7



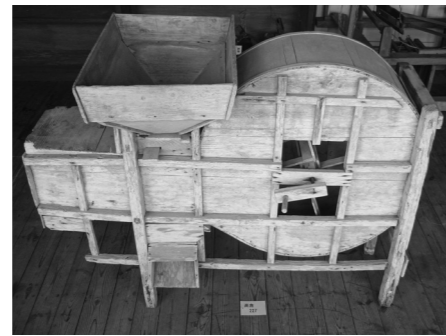
④1 - 8

④2 ^{きざるす} [木摺臼] するす

摩擦によって粃殻を取り除く。二人が向かい合い、取っ手や縄を引いて回した。本体はマツなど、軸はクリ。



④1 - 9



④1 - 10



④2 - 1



④2 - 2



④1 - 11



④1 - 12



④2 - 3



④2 - 4

④③ ^{とすらす}【土摺臼】

天井から吊るした取っ手などを回して粃殻を取り除く。調子を合わせる「臼ひき歌」を歌いながら数人で作業した。竹籠の中に粘土を入れて作る「とすらす大工」が作る。芯はクリ、カラタケを編み、粘土にクヌギの歯を入れた。

鳥海(大東)では明治生まれの人が、さまざまな仕事の一つとして二代目のとすらす大工をしていた。



④③ - 1



④③ - 2



④③ - 3



④③ - 4

④④ 【麦打ち台】 まんばん、むぎぶちだい、麦叩き

麦を打ちつけて脱穀する。四隅に足をつけたり、臼に載せたりして使用した。大工に作ってもらうが、器用な人はスギ板とカラダケで自分で作ったという。



④④ - 1



④④ - 2

④⑤ 【糧切り】 かできり、だいこぎり

ご飯の量をふやすために大根を刻み米とともに炊く「かて飯」を作るためのカッター。巖美町沖野々(一関)の茂庭氏が製造した「五串器」(明治15年~昭和25年製造)(④⑤-1)、折壁(室根)での製造の墨書のあるもの(④⑤-4)などが販売されていた。刃を買ってきて自分で作ったともいい、④⑤-6、8は自作とみられる。



④⑤ - 1



④⑤ - 2



④⑤ - 3



④⑤ - 4



④⑤ - 5



④⑤ - 6



④⑤ - 7



④⑤ - 8

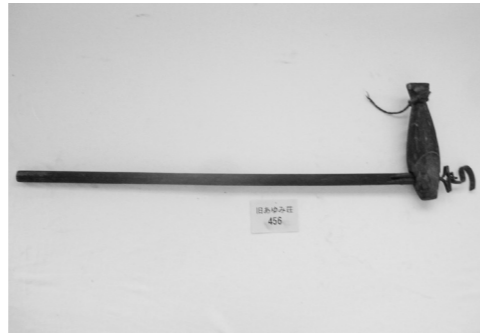
④⑥ 【自在鉤】 かぎ、じざい

囲炉裏の上に吊って弦鍋などを掛ける。上下できるので火力の調整が「自在」であることからそう呼ばれる。

木製(クリなど) (④⑥-1、2)、竹筒(モウソウダケ、カラダケ) (④⑥-3、4、5、6)、鉄製(④⑥-7、8、9、10)がある。鉄製は鍛冶屋が作った。



④⑥ - 1



④⑥ - 2



④⑥ - 3



④⑥ - 4



④⑥ - 5



④⑥ - 6



④⑥ - 7



④⑥ - 8



④⑥ - 9



④⑥ - 10

④⑦ 【臼、たて杵、横杵、石臼】

穀物の脱穀や製粉には臼を使った。藁で編んだ輪の中に入れて、殻粒が出ないようにしてたて杵でついた。また正月などの餅をつくのも臼である。

臼は近くの大工が作った。昔はカズの木(ヌルデ)、その後はケヤキで一本の木から削り抜く。たて杵はサダメシ(リョウブ)などで作った。

正月に鏡餅や「みたまのめし」などを入れた箕を置くのは、しめ飾りをした伏せた臼であった。また、庭先に臼を並べてその上に板を張り、南部神楽の舞台にした。

石臼は石屋が作った。冬に大豆を挽いてしみどうふ・すみどうふ(凍豆腐)を作り、保存した。



④⑦ - 1



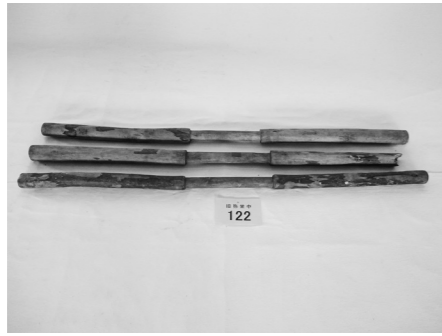
④⑦ - 2



④⑦ - 3



④⑦ - 4



④7 - 5



④7 - 6



④7 - 7



④7 - 8



④7 - 9



④7 - 10



④7 - 11



④7 - 12

(5) マチ(町)やイチ(市)で買ってきた道具

イチの立つ日に、買い物に行っていました。花泉の互市、興田(大東)、松川(東山)、また佐沼(登米市)のイチなどがありました。盆の買い出しや年末の「詰め市」などはにぎわったといいます。

一関、千厩、摺沢(大東)などのマチには店があり、全国で流通している道具などを購入しました。また鋸など特別な技術が必要な物は、専門の店まで行っていました。

流通品の農機具や養蚕の道具は、農協や販売店、専門の業者が回ってきての販売もありました。

④8 [千歯扱き] せんば

稲や麦の脱穀作業に使う。台木に自分で杉板や脚をつけ、踏み板をひき、使用した。昭和30年代には足踏み脱穀機に変わっていたが、丁寧に脱穀したい種籾や、豆など穀物には使用し続けた。

どの家にもあり、おじいさんの代に店で買ったのか、行商から購入したのではないかという。倉吉(鳥取県)と若狭(福井県)が有名な産地であり、明治末から大正期には全国に行商に回り、横浜から宮古に船で入り、前沢(奥州市)、築館(栗原市)まで回った倉吉の商人の記録がある。

市内の所蔵品も倉吉製(④8-1、2、3)や若狭製(④8-4、5、6)、ほかに山形市宮町製(④8-7)、また山目町(一関)の菊地栄三郎稲扱製造所(④8-8)などがある。

台木には「無類飛切伽羅鋼請合」などその切れ味と材質を宣伝した飾り文字や製造所名などが墨書され、また所有者の名前も〇〇様などと書かれており、刃の打ち直しに預けたためと考えられる。

刃には製作者などが彫られており、平打ちの刃のほかに面取、甲丸打がある。



④8 - 1



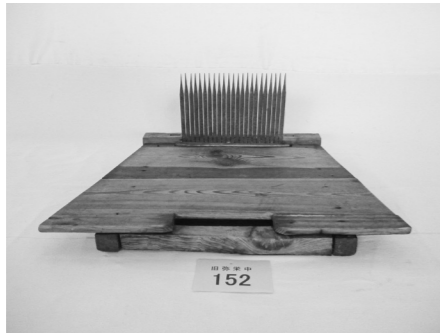
④8 - 2



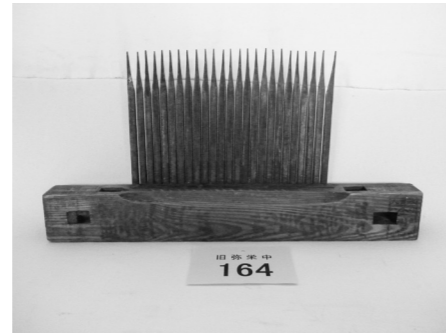
④8 - 3



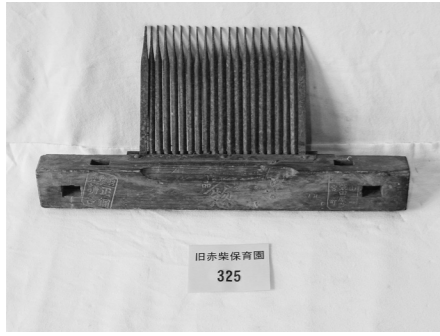
④8 - 4



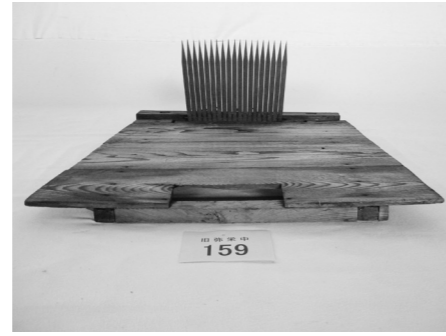
④8 - 5



④8 - 6



④8 - 7



④8 - 8



④9 - 3



④9 - 4



④9 - 5



④9 - 6



④9 - 7



④9 - 8



④9 - 9



④9 - 10



④9 - 11



④9 - 12

④9 ^{すき} [犁] ばこう(馬耕)

馬などに曳かせて田の土をかえす「たんぶち(田打ち):田起こし」に使う。

岩手県では明治期に福岡の抱持立犁(無床犁)の教師を招いたというが、山目(一関)では明治40年に佐藤庄太郎氏が北海道から導入したのが始まりという。大正期には鉄をつけたモッタテバコが開発され、また全国で改良された有床の犁が作られ、市販されるようになっていく。松山犁(長野県、松山原造製作) (④9-11)や高北^{たかきた}犁(三重県名張市高北農機製作所) (④9-14)の短床犁などである。萩荘(一関)で作られた犁もある(④9-9)。昭和期には傾きを左右に変えることができる高北式新国富号や岩井式(宮城県岩沼市) (④9-12)など双用犁が登場し、画期的であったという。

昭和30年代に石油発動機のテラーが普及していくが、やはり深耕は、ばこうで行ったという。



④9 - 1



④9 - 2



49-13



49-14



49-15



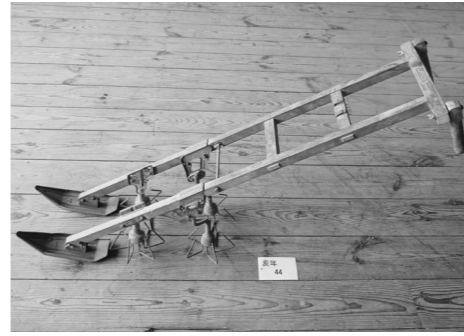
49-16



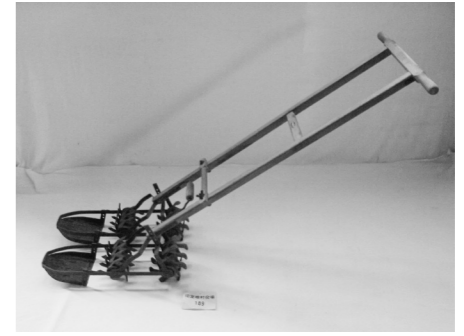
50-5



50-6



50-7



50-8

50 【除草機・田打車】 くさととり

草取りは暑い中、中腰になり素手で草を引き抜く辛い作業だったが、「くさととり」は、爪で稲の株の間の草と土をかき混ぜ、草を取り除くことができる。

昭和35年頃からはMCP、PCPなど農薬が普及し、草取りに田に入ることは大幅に減る。



50-1



50-2



50-3



50-4

51 【箕】 てみ、干しざる

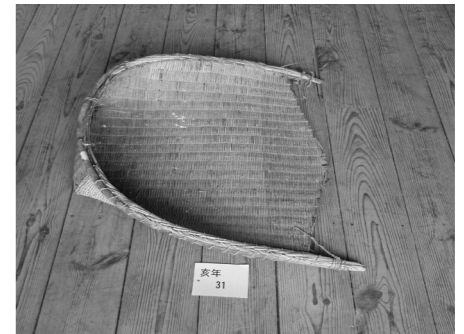
脱穀した米や豆を上下に動かして、軽いものを外に出したり前に寄せたりして選別する。詰め市や店で買う。

じさの木(エゴノキ)、サダメシ(リョウブ)などで枠を作りヤマザクラの皮を^{たて}経に入れ、竹を編んだものである。(51-8)は、全てヤマザクラの皮で作っている。当地方の箕は多くが先がとがった五角箕などといわれる、全国でも特殊な形である。花泉の互市で買い求めた話を多く聞く。五角箕は宮城県大和町宮床での生産が有名というので、それらが出回っていたのかもしれないが、大東の籠屋も同じ形で作っていた。

「木ざん、竹ざん、木の皮ざん、中でぼさつをはな踊る、なんだ?」というなぞなぞを言っていたといい、身近な道具であった。



51-1



51-2 (51-1を横から見た)



⑤1 - 3



⑤1 - 4



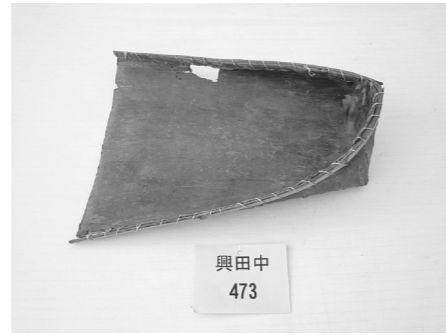
⑤1 - 5



⑤1 - 6



⑤1 - 7



⑤1 - 8



⑤2 - 3



⑤2 - 4



⑤2 - 5



⑤2 - 6



⑤2 - 7



⑤2 - 8

⑤2 【足踏脱穀機】

板を踏み歯を回転させて稲の穂から粃を抜く。脱穀の道具には、竹の筒(扱管・扱箸)、千歯扱きがあり、大正期頃から足踏み脱穀機が使われるようになった。昭和40年頃には発動機付き脱穀機に変わる。

農機具店などから購入したといい、島根県(⑤2-8)、愛知県豊川市(⑤2-7)、神奈川県川崎市(⑤2-5)、埼玉県川越市(⑤2-6)、山形県天童市(⑤2-4)、福島県(⑤2-3)などさまざまな地方で作られている。



⑤2 - 1



⑤2 - 2

⑤3 【桑扱き、桑切り包丁、桑切り機】

蚕に与えるために摘み取った桑の枝から葉を取り、桑を刻む。蚕の大きさ(齢期)によって桑の大きさを変えて与えた。

桑の枝から葉をとる桑扱き機(⑤3-1)は昭和30年頃にはもう使われていなかった。桑切り包丁は金物屋に売られていたという。



⑤3 - 1



⑤3 - 2



⑤3 - 3



⑤3 - 4



⑤5 - 1



⑤5 - 2

⑤4 【毛羽取り機】 けぼとり

繭の毛羽を取り除く。以前は毛羽とり(⑤4-1)で手作業で行っていたので、機械ができて大幅に楽になったが、油断すると繭を巻き込むなどして大変だったという。



⑤4 - 1



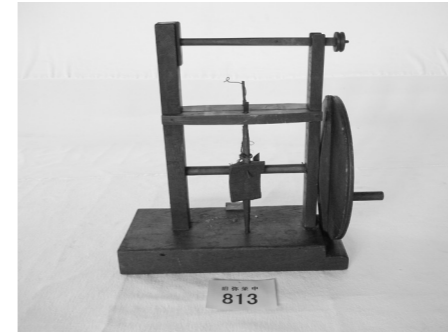
⑤4 - 2



⑤4 - 3



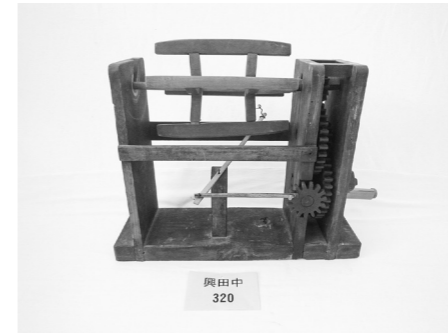
⑤4 - 4



⑤5 - 3



⑤5 - 4



⑤5 - 5



⑤5 - 6

⑤6 【カルトン】 蚕皿、蚕鉢

成長した蚕を繭を作らせるために「まぶし」に移すための盆。柿渋が塗られている。大東では地区民運動会で「カルトン競争」があったという。



⑤6 - 1



⑤6 - 2

⑤5 【座繰】 ざぐり、ざんぐり

繭を鍋で煮て糸繰鍋に移し、糸口を引き出し、数本をあわせて糸繰棒に巻き取る。割竹の腕木、綾棒が左右に振られることによって均一な巻き取りができる。⑤5-3、4は円形のハンドル、⑤5-5、6は歯車をハンドルで回す。

以前は糸巻台(牛首)(⑤5-1、2)に糸棒を取り付けた。

⑤7 ^{たばこ}【煙草のし】

乾燥したタバコの葉のしわを伸ばす。葉のしは、手のかかる大変な作業であり、一家総出で行ったという。昭和13年に大原(大東)の村上惣太郎、八沢村(藤沢)の三浦米治ら、昭和30年代には田河津(東山)の高橋泰助らが「葉のし器」を作ったと資料にあるので、それらと思われる。一人で作業できる工夫がされている。しかし、普及しなかったようで、使った人の話は聞かない。

昭和37年に葉のしせずに出荷できる「幹干し納付」になり、作業から解放される。



⑤7 - 1



⑤7 - 2

⑤8 【縦鋸】 まいびき、まえびき、がんだり 【横鋸】 のこぎり

木材を板に挽くために使う大型の縦挽鋸(⑤8-1~4)。墨で印をつけた上から挽き、その後に横にして挽いた。製材用の木材・鉄道の枕木を切りだす、洪水用舟の舟板を切るなどに使用。山に入る職人「もとやま」が使った。

鋸は専門の職人しか作れないので、一関のかがや鋸店まで買いに行った、などという。

一般の人が大工道具に使うのは横挽鋸(⑤8-5、6)。鋸店、金物店、鍛冶屋で買ったともいう。

柄や鞘は自分で作った。柄はキリが手触りがよく加工しやすいのでよい。鞘はスギ。



⑤8 - 1



⑤8 - 2



⑤8 - 3



⑤8 - 4



⑤8 - 5



⑤8 - 6

⑤9 【炭火アイロン】 【こて】

炭火アイロンは中に炭火を入れ、布を伸ばす。火熨斗ひおしに変わって、明治期に伝来し、大正期に作られたといい、当地方では昭和30、40年代まで使われていた。しかし、囲炉裏で温めてすぐに使える「こて」(⑤9-7、8)が日常的によく使われ続けていたという。⑤9-6は電気アイロン。



⑤9 - 1



⑤9 - 2



⑤9 - 3



⑤9 - 4



⑤9 - 5



⑤9 - 6



⑤9 - 7

田河津小
48



⑤9 - 8

興田中
46

(6) 当地方において特徴的な道具

⑥0 【割り物、曲げ物】 ぜん、まるぜん こねばち ひすこ

割りぬきで作られた丸膳やこねばち、曲げ物の弁当箱が日常で使われた。こねばちは自分たちで作ったという。弁当箱は秋田から売りに来たともいう。



⑥0 - 1

興田中
169



⑥0 - 2

旧あゆみ荘
6



⑥0 - 3

旧赤柴中
1075



⑥0 - 4

旧あゆみ荘
171



⑥0 - 5

旧赤柴保育園
184

⑥① 【油締、油搾】 油締め

麻布にジュウネやゴマを入れ、穴に入れて上からふたをし、横木を載せ、くさびを入れて負荷をかけて油を絞った。ツバキを絞る場合もあった。旧暦11月15日は「油しめの日」といい、集まって油を絞っていたという。

⑥①-2には、「文政四かのと巳年 大工源太夫」と彫られた文政4年(1821)の銘がある。



⑥①-1



⑥①-2

⑥② 【川舟】 用心舟

洪水に備え、北上川や磐井川沿いの家々では大工に作ってもらった簡単な舟を軒にあげていた。かいはスギ、ナラ、クリなどで作ったという。



⑥②-1

⑥③ おしらさま

養蚕の神様として、決まった日に取り出してきて家の女の人達がおまつりをしたという。軸は桑の木で作られており、衣を着せていく。



⑥③-1



⑥③-2

3 データ編

3 データ編

(1) 掲載資料一覧

・名称は標準名である。

・地域は、当初受け入れた地域である。

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
①	1	背負いもっこ	縦55、横52、高さ91(cm)	一関	内寸:高さ36cm、紐:長さ106cm	10100214
①	2	背負いもっこ	直径40、高さ45、口径40(cm)	東山		50100060
①	3	背負いもっこ	長さ76、幅69、高さ70、深さ54(cm)	川崎		90100102
①	4	背負いもっこ	縦68、横60、高さ84(cm)	一関	内寸:高さ36cm、紐:長さ84cm、継ぎ目に針金使用	10100221
①	5	背負いもっこ	縦78、横46、高さ91(cm)	一関	内寸:高さ33cm、肩当て部分:長さ57cm、背当てに萱、布で覆っている、背負い紐は布製、籠部欠損あり	10100218
①	6	背負はしご	縦5、横31、高さ112(cm)	大東	副木あり	90100056
②	1	えぶり	縦233、横168、高さ13(cm)	一関	柄を紐でくくって継いでいる	10101838
②	2	えぶり	長さ107、幅187、高さ14(cm)	川崎		70100313
②	3	えぶり	柄部:長さ186、直径6、歯部:長さ186、幅15、厚さ2(cm)	千厩		40100353
②	4	えぶり	長さ163、幅76、厚さ17、柄径4(cm)	大東		30100479
②	5	えぶり	全長180cm、本体:幅58、高さ22、板の厚さ4(cm)	花泉	木・竹製	20200041
②	6	えぶり	縦170、横52、高さ18(cm)	一関	歯(木製、10本) 歯1本:縦8、横3(cm)、柄(木製)直径4cm、歯板の穴:直径4cmに柄が通してあり可動、留め金は釘	10100136
③	1	振り打ち	縦144、横23、高さ4(cm)	一関	柄:直径4、長さ144(cm)、打ち棒:直径2、長さ110(cm)、枢は紐	90100002
③	2	振り打ち	縦123、横19、高さ3(cm)	一関	柄:直径3、長さ123(cm)、打ち棒:直径3、長さ85(cm)、枢は紐	90100279
③	3	振り打ち	縦141、横6、高さ3(cm)	一関	柄:直径3、長さ135(cm)、打ち棒:直径2、長さ141(cm)、枢は紐	10100052
③	4	振り打ち	縦132、横13、高さ5(cm)	一関	柄:縦5、横3、長さ132(cm)、打ち棒:直径2、長さ128(cm)、枢と打ち棒を紐で留めている	90100278
③	5	振り打ち	柄 直径4、長さ154、打ち棒 直径2、長さ157(cm)	花泉	閉じた状態 縦157、横14(cm)、開いた状態 縦157、横90(cm)、柄の内側に刻印(2ヶ所)「「ヤマ」ニ」	20600012
③	6	振り打ち	長さ178、幅15、厚さ4(cm)	川崎		90100954
③	7	振り打ち	幅19cm、柄:長さ148、直径4(cm)、打ち棒:長さ160、直径2(cm)	花泉	柄は竹	20200037
③	8	振り打ち	幅19cm、柄:長さ132、幅3(cm)、打ち棒:長さ172、幅2(cm)	花泉	柄は竹	20100109
③	9	振り打ち	縦155、横20、高さ4(cm)	一関	柄(竹製):直径3、長さ155(cm)、打ち棒(桜の木):直径3、長さ82(cm)、枢は木製	90100001
③	10	振り打ち	長さ164、幅21、最大厚6(cm)、竿:直径3cm	室根	柄は竹	90100084
③	11	振り打ち	縦185、横17(cm)	千厩		90100516

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
③	12	振り打ち	縦171、横23(cm)	千厩		90100514
④	1	藁打ち槌	直径10、高さ36、柄部分:直径5(cm)	千厩		40100385
④	2	藁打ち槌	長さ25、直径10、柄径5(cm)	藤沢		80200037
④	3	藁打ち槌	縦11、横12、高さ29(cm)	一関	胴部分 高さ16cm	90100385
④	4	槌	長さ100、最大幅26、厚さ17、最小幅3(cm)	藤沢		80200018
⑤	1	藁しごき	縦20、横22、高さ10(cm)	一関	歯(竹製、計5本)長さ8、間隔3(cm)	10100807
⑤	2	藁しごき	縦26、横25、高さ13(cm)	一関	歯(釘、元は6本、2本欠損) 長さ7、間隔3(cm)	10100808
⑥	1	俵編み機	長さ112、幅41、高さ41(cm)	花泉	木製木錘8が2対(長さ13cm、15個、1個欠)	20200033
⑥	2	俵編み機	縦59、横121、高さ64(cm)	大東	木錘(7個)あり、直径7、長さ11(cm)	30100507
⑥	3	俵編み機	長さ120、幅30、高さ32(cm)	花泉		20100326
⑥	4	俵編み機	縦36、横123、高さ37(cm)	花泉		20400077
⑥	5	棧俵編み台	径33、高さ6(cm)	花泉		20100009
⑥	6	棧俵	径35、高さ3(cm)	花泉		20100008
⑦	1	苙編み機	長さ53、幅177、高さ160(cm)	川崎		90101073
⑦	2	苙編み機	縦43、横157、高さ138(cm)	東山	藁を通す部分 縦48、横102、高さ4(cm)、穴23個	50200094
⑦	3	苙編み機	長さ184、幅46、高さ110、織幅97(cm)	花泉	木製	20200053
⑦	4	苙織り機	高さ151、幅303、奥行92(cm)	花泉		20100097
⑧	1	蓑	縦113、横78、厚さ10(cm)	一関	紐付き、長さ124cm、首の凹部分:長さ27cm、幅11cm、布の編み込みあり、糸にビニール紐の飾り入り	10100643
⑧	2	蓑	縦124、横80、厚さ11(cm)	一関	紐付き、長さ147cm、首の凹部分:長さ24cm、幅11cm、布の編み込みあり、横糸に麻紐を使用	90100338
⑧	3	蓑	長さ113、幅63、厚さ10(cm)	東山	紐の長さ155cm	50100054
⑧	4	蓑	長さ115、幅67(cm)	花泉	藁製	20200029
⑧	5	背中あて	長さ68、幅30、厚さ20(cm)	室根		60200019
⑧	6	背中あて	長さ80、幅35、厚さ3(cm)	川崎		70100362
⑧	7	肌蓑	長さ146、幅63(cm)	花泉	墨書あり	20100245
⑧	8	肌蓑	縦160、横80(cm)	花泉	竹の棒、縄付き	20400074
⑧	9	肌蓑	縦84、横21(cm)	東山	紐付き 長さ138cm	50200158
⑧	10	着ごさ	長さ101、幅107、頭部分長さ41、頭部分幅48(cm)	花泉		20100376
⑧	11	腰蓑	縦60、横47、厚さ4(cm)	一関	さがりの長さ39cm、紐の長さ62cm、64cm	10100803
⑧	12	腰蓑	長さ50、幅34、厚さ5、最大幅(紐含む)130(cm)	大東		30100005
⑨	1	菅笠	直径55、高さ11(cm)	一関	紐付き(片側) 長さ40cm、骨は16本、頭の底には包装紙を敷いている、破れ、ほどけあり	10101128
⑨	2	菅笠	高さ13、径49(cm)	花泉		90100445
⑩	1	雪靴	縦21、横10、高さ19(cm)	一関	足底サイズ 21cm	10100661
⑩	2	雪靴	長さ17、幅10、高さ19、深さ17(cm)	川崎		90100845
⑩	3	雪靴	縦22、横13、高さ20(cm)	一関	底に台、乳を作っている、糸を使用、足底サイズ20cm、紐:長さ36cm、装飾あり	10100663
⑩	4	雪靴	長さ26、幅11、高さ29、紐46(cm)	大東		30100022

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
⑩	5	つまかけ	長さ48、幅13、高さ6、紐の長さ50(cm)	東山		50100048
⑩	6	つまかけ	長さ23、幅10、高さ6、紐の長さ50(cm)	東山		50100047
⑩	7	つまかけ	縦28、横12、高さ8(cm)	千厩		90100592
⑩	8	雪靴の型	縦22、横9、厚さ4(cm)	一関		10101432
⑪	1	はばき	縦30、横37(cm)	一関	紐(麻紐)の長さ 141cm	10100655
⑪	2	はばき	長さ33、幅37、厚さ1、最大幅(紐含む)66(cm)	大東		30100009
⑪	3	はばき	縦29、横28(cm)	一関	紐:片側36cm×2本、片側編みのほつれあり、布をたて糸に編み込んでいる	10100652
⑪	4	はばき	長さ27、幅35、厚さ1以下、最大幅(紐含む)97(cm)	大東		30100007
⑪	5	はばき織り機	縦19、横72、高さ71(cm)	大東	部品1個(箆)付き、縦32、横6、厚さ5(cm)	30100504
⑪	6	はばき織り機	縦31、横66、高さ77(cm)	大東	部品2個(箆)付属 ①長さ30、幅5、厚さ2(cm)②長さ28、幅8、厚さ2(cm)	30100505
⑫	1	下駄	縦23、横11、高さ10(cm)	一関	鼻緒には布の編み込み、婦人用	10101131
⑫	2	下駄(未製品)	長さ23、幅9、高さ6(cm)	花泉		20100394
⑬	1	嬰兒籠(えじこ)	外径67、口径38、高さ36、深さ31、底面孔径16(cm)	大東		30100516
⑬	2	嬰兒籠(えじこ)	外径77、口径54、高さ30、深さ24、底面孔径11(cm)	大東		30100518
⑬	3	嬰兒籠(えじこ)	直径75、高さ35(cm)	一関	底の穴 直径9cm、口径 48cm、外側両端に取っ手あり、涎掛け付き 縦20cm、横22cm	10100621
⑬	4	嬰兒籠(えじこ)	直径62、高さ33(cm)	一関	底の穴 直径10cm、口径 42cm、外側両端に取っ手あり、上縁に布の編み込み、紐で絞って処理している	10100624
⑭	1	箆	縦154、横30、高さ22(cm)	一関	丸竹の柄、針金留め	10101239
⑭	2	箆	縦157、横28、高さ14(cm)	一関	針金留め	90100027
⑭	3	箆	縦150、横20、高さ16(cm)	一関	紐で留める	10101234
⑭	4	箆	縦147、横32、高さ6(cm)	一関	糸で留めている、根元は金具使用 柄:直径3、長さ82(cm)	10101240
⑭	5	座敷箆	縦66、横26、高さ2(cm)	一関	針金、糸で留めている、柄:直径2、長さ21(cm)	90100029
⑭	6	座敷箆	縦88、横29、高さ4(cm)	一関	柄:直径2、長さ34(cm)、針金、糸、麻紐で留めている	90100028
⑮	1	まぶし折り機	縦42、横48、高さ61(cm)	千厩		40100794
⑮	2	まぶし折り機	長さ41、幅36、最大幅46、高さ43(cm)	東山	「登録商標 ユタカ式 改良蒔折器 豊川商會工場 愛知縣 特産物品質 御使用法 保証書 優良金賞牌受領」のシール、「實用新案 第八一六二六号 第四五四一八号 第二二〇三二号」の焼印あり	50100012
⑮	3	まぶし折り機	縦26、横85、高さ31(cm)	川崎		70100459
⑮	4	まぶし折り機	縦26、横91、高さ28(cm)、歯:元は23本(11本、12本、2ヶ所欠損) 長さ3、幅1、奥行3、間隔6(cm)	一関	金属製、台のみ木製、脚部分に金属製のラベル「片倉の経済族製造機 片倉営業所 大阪市北区北梅田町一二」	10100798
⑯	1	まぶし	長さ215、幅15、厚さ15(cm)	川崎		70100447
⑯	2	まぶし	長さ230、幅20、厚さ3(cm)	川崎	1マス:縦18、横10(cm)	90101019
⑯	3	まぶし	縦20、横11、高さ11(cm)	川崎		90101016

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
⑯	4	まぶし	縦20、横17、高さ12(cm)	川崎		70100442
⑯	5	まぶし	縦132、横72、高さ9(cm)	千厩	一区画の間隔7cm	90100643
⑯	6	まぶし	縦71、横104、高さ8(cm)	一関	藁製、区切りの数:縦9×横42個 1個の縦の長さ7cm、折り畳んだ時横26cm	10100941
⑰	1	蚕箔	直径87、厚さ7(cm)	室根		60200117
⑰	2	蚕箔	最大径88、内径84、高さ9、厚さ5(cm)	川崎	藁製	70100396
⑱	1	蚕網	直径78、厚さ1(cm)	川崎	藁縄製で全体は円形、網目は長方形	90100231
⑱	2	縄網	74×62(cm)	花泉	藁製	20200085
⑱	3	蚕網	直径79、厚さ1(cm)	川崎	藁縄製で全体形は円形、網目は四角形	70100426
⑱	4	蚕網	直径78、厚さ1(cm)	川崎	周縁は藁縄製で円形、網は藁製、網目は四角形の中に対角線がある(縦糸と横糸は対角線よりも太い)	90100236
⑱	5	蚕網	直径76、厚さ1(cm)	川崎	円形、周縁と中への十字(縦糸、横糸)は藁縄製、網の部分は藁製、網目は四角形の中に対角線あり	90100235
⑱	6	蚕網	縦66、横84、厚さ1(cm)	室根		60100230
⑲	1	真綿枠	縦35、横28、高さ5(cm)	一関	糸をかける部分 縦26、横28(cm)、紐付き	10100822
⑲	2	真綿枠	縦80、横36、高さ11(cm)	一関	糸をかける部分(金属棒、直径0.5cm) 縦31、横34、高さ3(cm)	10100824
⑲	3	真綿枠	長さ39、幅30、厚さ7(cm)	千厩		90100198
⑲	4	真綿枠	長さ39、幅24、厚さ5(cm)	千厩		90100195
⑳	1	機織り機	縦237、横140、高さ175、座高55(cm)	一関	織りかけの布、箆、綜統あり、ビニールテープなどで補修している	90100137
⑳	2	機織り機	縦136、横241、高さ181(cm)	室根		60200123
㉑	1	苧桶(おぼけ)	直径34、高さ19(cm)	一関	底面(四角):縦23、横25(cm)、布製の補強2ヶ所あり、網代編み、底破れあり	90100156
㉑	2	苧桶(おぼけ)	直径33、高さ21(cm)	一関	底面(四角) 縦24、横22(cm)、網代編み、側面にマジック書き込みあり	90100377
㉒	1	糸枠	縦26、横26、高さ30(cm)	大東	横板に墨書あり「百五拾刃」、反対側横板に焼印あり	30100290
㉒	2	糸枠	縦11、横22、高さ11(cm)、軸穴:縦横1.3cm角	一関	木釘使用、焼印「マル」水「ヤマ」サ、墨書「水澤町」「六拾五刃」「入口」「三本木」「朴澤サツキ?」「水澤三本木」	90100144
㉒	3	糸枠	直径23cm、長さ35cm	一関	六つ目編み、編みの目:縦3cm、横4cm	10100906
㉒	4	糸枠	直径25cm、長さ37cm	一関	六つ目編み、編みの目:縦2cm、横2cm	10100919
㉓	1	糸車	長さ143、幅33、高さ68(cm)	室根		60100298
㉓	2	糸車	縦33、横145、高さ70(cm)	大東		30100278
㉓	3	糸車	縦33、横133、高さ72(cm)	東山	車部分:直径64、厚さ13(cm)	90100202
㉓	4	糸車	縦43、横130、高さ72(cm)	東山	車の直径:63cm、とんぼ32本(うち2本欠損)	50200067
㉓	5	糸車	縦36、横124、高さ69(cm)	室根		60100138
㉓	6	糸車	縦39、横138、高さ70(cm)、車部分:直径60cm、幅9cm、軸部分:直径7cm、幅12cmの八角形	一関	木製、車枠は竹製、台部分、車部分修理あり(別の木で補修)、車の装着部分ボンド接着、車のたが針金固定	10100777
㉓	7	糸車	縦39、横139、高さ70(cm)、車部分:直径60cm、幅9cm、軸部分:直径7cm、幅12cmの八角形	一関	木製、車の枠は竹製、間に紐でかがる、トンボはT字の木製(8本)	10100768

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
㉓	8	糸車	縦34、横123、高さ65(cm)、車部分：直径63cm、幅8cm、軸部分：幅10cmの八角形	一関	木製、車の枠は竹製(紐でかがる)、トンボは板をH形に組む(8本×2、うち1本欠損)、欠損あり	10100773
㉔	1	籠	縦15、横20、高さ26(cm)	一関	紐:長さ70cm、ほどけあり、あけびつる	90100161
㉔	2	籠	縦20、横22、高さ25(cm)	一関	底は四角、口は円、桜の皮製、縁は竹製、針金でかがっている	90100162
㉔	3	籠	縦22、横36、高さ51(cm)	一関	紐の一部あり、ほどけ、破れあり	90100157
㉔	4	籠	縦9、横30、高さ33(cm)	一関	紐:長さ144cm	90100158
㉔	5	籠	縦8、横48、高さ53(cm)	一関		90100159
㉔	6	籠	縦10、横44、高さ35(cm)	一関	紐:長さ248cm	10101022
㉕	1	スキー	長さ192、幅9、厚さ9(cm)	千厩		90100576
㉕	2	櫓	縦92、横70、高さ18(cm)、脚(櫓部分):縦92、横6、高さ15(cm)、荷台部分:縦69、横53(cm)	一関	木製、台と櫓部の繋ぎは針金で補強	10100240
㉕	3	櫓	縦330、横103、高さ40(cm)	一関	本体は木製、台には丸太使用、金具などは金属製	10100212
㉕	4	櫓	長さ241、幅35、高さ9(cm)	室根		60200231
㉕	5	下駄スケート	縦31、横9、高さ9(cm)	花泉		20100188
㉕	6	下駄スケート	長さ32、幅9、高さ6(cm)	花泉		20200079
㉕	7	かんじき	縦35、横25、高さ7(cm)	一関	片側にアンテナ紐(?)を張っている、針金で補修あり	10100666
㉕	8	金かんじき	縦12、横12、高さ6(cm)	東山		50200162
㉖	1	苗籠	直径54、高さ33(cm)	千厩	天秤棒で担いで運ぶための縄が2ヶ所に取り付く	40100349
㉖	2	苗籠	直径54、高さ34(cm)	一関	竹製、縁は針金でかがっている、紐付き(藁縄) 長さ122cm(2本)、六つ目編み:縦5cm、横7cm	90100020
㉗	1	桑籠	口径:長径59、短径50(cm)、底径50、高さ82(cm)	東山		50100084
㉗	2	桑籠	直径68、高さ79(cm)	千厩		40101153
㉘	1	蚕籠	直径85、高さ7(cm)	大東	竹製、円形	30100367
㉘	2	蚕籠	長さ99、幅76、高さ3(cm)	室根		90100721
㉙	1	筥	口径13、最大径15、長さ79(cm)	川崎		90100221
㉙	2	筥	口径12、最大径14、長さ77(cm)	川崎		90100222
㉙	3	筥	直径10、長さ41(cm)	一関	竹製、紐留め、返しは長さ10cm	90100164
㉙	4	筥	口径8、最大径11、長さ40(cm)	川崎		90100224
㉙	5	筥	縦53、横50、高さ37(cm)	川崎	浮き:長さ17、幅7(cm)、紐の長さ284cm	90100227
㉙	6	びく	縦19、横24、高さ29(cm)	一関	口が挟まっている、口径18cm、藁紐付き	90100160
㉚	1	すいのう	縦57、横20、高さ4(cm)	大東		30100077
㉚	2	すいのう	縦49、横17、厚さ3(cm)	室根		60100240
㉚	3	すいのう	縦74、横21、高さ5(cm)	室根		90100780
㉚	4	すいのう	長さ45、幅16、高さ4(cm)	川崎		90100100
㉚	5	箆	縦20、横12、高さ32(cm)	一関	購入品 値札(1000円)付き	90100030
㉚	6	箆	直径13、高さ21(cm)	一関	箆部分:高さ14cm、竹製、枠は金属製、旧札「のり取り箆」	90100394
㉚	7	箆	直径32、高さ20(cm)	一関	竹製	10101161
㉚	8	箆	直径33、高さ23(cm)	一関	枠に木、竹製	10101160
㉛	1	木櫃	縦75、横126、高さ104(cm)	室根	4段あり、「二、三、四、中」の文字あり	60100485

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
㉜	2	木櫃	縦93、横189、高さ155(cm)、各段の高さは(下から)31cm、30cm、26cm、35cm、32cm	一関	5段組、各段に墨書あり。正面に下から「一」から「五」、側面に「下より壱」から「下より五」	10100285
㉜	3	木櫃	縦70、横122、高さ118(cm)	一関	内寸 縦57、横107(cm)、4段重ね、表面に墨書「昭和二十四年十月 五穀豊饒 ○○家」	10102613
㉜	4	木櫃	縦70、横121、高さ87(cm)、内寸 縦58、横108(cm)	一関	3段重ね、側面に墨書「昭和二十四、一〇、天人地」	90100410
㉝	1	膳	縦31、横32、高さ9(cm)	室根	底部外面に焼印あり	60200324
㉝	2	膳	縦31、横31、高さ8、深さ2(cm)	大東		30100172
㉝	3	椀	直径11、高さ9(cm)	花泉	蓋:直径11cm、高さ2cm、4つ全ての蓋表面、椀底裏面に墨書「本」	20500200
㉝	4	椀	椀:口径12cm、底径6cm 最大高(蓋をした状態)11、高さ8 深さ5(cm)	川崎		70100186
㉞	1	鍬	縦54、横19、最大高60、柄の長さ109(cm)	大東	刻印あり	30100433
㉞	2	鍬	縦94、幅16、高さ52、刃の長さ44、柄径3(cm)	千厩	刃部に菊一文字の刻印あり	40100358
㉞	3	鍬	長さ79、幅17、高さ69(cm)	花泉	刃:長さ60cm、幅17cm、菊一の銘あり、焼印あり	20200034
㉞	4	鍬	長さ88、幅15、高さ70(cm)	川崎	斧曲り台	90100910
㉞	5	鍬	縦80、横18、高さ80(cm)	一関	刃(鉄製):縦45、横12(cm)、刃先に欠けあり、柄(木製):縦5、横4、長さ100(cm)、風呂(木製):縦32、横15、高さ4(cm)	90100286
㉞	6	鍬	縦84、横12、高さ80(cm)	一関	刃(鉄製):縦41、横12(cm)、柄(木製):縦5、横3、長さ102(cm)、柄に直接刃を取り付け	90100288
㉞	7	備中鍬	長さ69、幅20、高さ59(cm)	川崎		70100278
㉞	8	備中鍬	縦62、横22、高さ74(cm)	一関	刃(鉄製、3枚):縦34、横21、厚さ1(cm)(1本:縦34、横2(cm)、柄(木製):縦5、横3、長さ95(cm)	90100005
㉟	1	鎌	縦67、横24、厚さ3(cm)	一関	刃(鉄製):縦5、横24(cm)、柄(木製)	10100175
㉟	2	鎌	縦66、横23、厚さ3(cm)	一関	刃(鉄製):縦4、横23(cm)、彫り「登録 豊稔 ■■■■」、柄(木製)	10100174
㉟	3	鎌	長さ46、幅19、柄径3(cm)	川崎		90100966
㉟	4	鎌	最大長62、柄長さ54、柄幅3、刃:長さ23、幅8、厚さ1(cm)以下	室根		60200212
㉟	5	鎌	長さ49、幅25、厚さ3(cm)(柄の部分)	川崎		90100939
㉟	6	鎌	縦74、横24、厚さ3(cm)	一関	刃(鉄製):縦7、横24(cm)、柄(木製)	10100177
㊱	1	土入れ	縦99、横17、高さ71(cm)、金属製部:縦31cm	千厩		90100061
㊱	2	土入れ	長さ74、幅23、高さ83(cm)	室根		60200431
㊱	3	土入れ	縦93、横18、高さ98(cm)	一関	柄(木製):直径3、長さ125(cm)、鋤簾(金属製):縦32、横18、高さ13(cm)、刃先は尖っている、網は1.5cm幅の縦線、手前に引く形状	10100041
㊱	4	土入れ	長さ110、幅19、高さ72(cm)	川崎		90100933
㊱	5	土入れ	最大縦117、最大横17、最大高60(cm)、土入れ部縦32、横17(cm)、:高さ16cm、柄:長さ115cm	室根		60200249
㊱	6	土入れ	幅17、長さ126(cm)	東山	柄 直径3、長さ110(cm)、金属部分 縦30、横18、高さ8(cm)、網は一辺2cmの六角形	50200079

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
③⑤	7	土入れ	長さ81、幅19、高さ85(cm)	川崎		90100934
③⑤	8	土入れ	縦128、横21、高さ90(cm)	一関	柄(木製):直径4、長さ125(cm)、鋤簾(金属製):縦30、横21、高さ18(cm)、刃先は尖っている、網は1cm幅の縦線	10100039
③⑥	1	馬鍬	縦44、横131、高さ57(cm)	一関	本体木製、取っ手は竹製、歯棹は全9本、1本の歯(円柱):直径3cm、高さ9cm	10100071
③⑥	2	馬鍬	縦41、横152、高さ53(cm)	一関	歯棹は全15本(木製)、1本の歯 直径約2cm、高さ10cm(歯形、材質が統一されていない)	10100070
③⑥	3	馬鍬	縦27、横172、高さ62(cm)	千厩	刃が13本(木製)	90100506
③⑥	4	馬鍬	縦20、横91、高さ60(cm)	室根	焼印あり	60100140
③⑥	5	馬鍬	縦33、横99、高さ53(cm)	室根		90100792
③⑥	6	馬鍬	長さ34、幅91、高さ53(cm)	藤沢	上部に焼印あり	80200027
③⑥	7	馬鍬	長さ34、幅90、高さ64(cm)	花泉		20100373
③⑥	8	馬鍬	長さ50、幅92、高さ45(cm)	川崎	表面、上側面、裏面、下側面に焼印あり	90100930
③⑦	1	田柮	縦65、横313、高さ6(cm)	一関	本体木製、歯は竹製(2cm幅)、杵部分 縦48cm、横33cm、柄は欠損	90100004
③⑦	2	田柮	長さ114、幅55、高さ16(cm)	花泉	焼印あり	20200040
③⑦	3	田柮	長さ43、幅178、高さ38(cm)	藤沢	六角形状をなす、一部破損あり	80200033
③⑦	4	田柮	径47、長さ224(cm)	室根		60100056
③⑧	1	揚水機	長さ177、幅74、高さ117(cm)	花泉	木製	20200052
③⑧	2	揚水機	長さ260、幅127、高さ183(cm)	花泉	足踏式	20100230
③⑨	1	田舟	長さ190、幅65、高さ29(cm)	室根		60100020
③⑨	2	田舟	長さ184、幅70、高さ17、深さ16(cm)	大東		30100443
④①	1	田下駄	縦46、横29、高さ11(cm)	室根		90100706
④①	2	田下駄	縦46、横27、高さ17(cm)	藤沢		80200031
④①	3	田下駄	縦62、横29、高さ6(cm)	千厩		90100503
④①	4	田下駄	縦58、横34、高さ7(cm)	大東		30100438
④①	5	田下駄	縦65、横31、高さ5(cm)	室根		90100770
④①	6	田下駄	本体:縦45、横26、高さ12、縄の長さ:156(cm)	室根	下駄の先端に各1個の焼印あり	90100769
④①	7	田下駄	縦54、横30、高さ7(cm)	一関	木製、鼻緒は藁、紐付きでの長さ:154cm、足を乗せる部分:縦42、横12cm	90100282
④①	8	田下駄	縦80、横19、高さ14(cm)	東山	足を置く部分:縦27、横14(cm)	90100657
④①	1	唐箕	奥行61、幅162、高さ132(cm)	川崎	表に「岩渕式 トーミ機 東磐井郡薄衣村 岩渕直人」製作第一二〇五號」の墨書あり	90100099
④①	2	唐箕	奥行67、幅152、高さ127(cm)	川崎	「特別最上白米大豆小豆、キヨメツキ■■■、ヌカトバス並■■二等白米、カルキ■■■」の縦書きの墨書あり	90100951
④①	3	唐箕	縦62、横161、高さ126(cm)	室根		90100678
④①	4	唐箕	奥行56、幅152、高さ125(cm)	川崎	側面に「遠藤□□」の文字あり	90100950
④①	5	唐箕	奥行141、幅63、高さ126(cm)	川崎		70100334
④①	6	唐箕	長さ158、幅67、高さ125(cm)	室根		90100790
④①	7	唐箕	縦50、横133、高さ126(cm)	一関	本体木製、ハンドル軸などは鉄製、投入口はブリキ貼り、本体に一体化、三番口の幅25cm、一番口上に文字刻み跡、投入口の目盛り「清吹」、「米キヨ」など(他判読不能)	10100141
④①	8	唐箕	縦58、横153、高さ121(cm)	東山		90100659

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
④①	9	唐箕	縦77、横163、高さ132(cm)	花泉	ハンドルのある面上部に墨書「永澤氏」、反対の面に墨書「明治三十七年 旧十月十日 菅生文太郎製造」菅生文太郎氏(明治末生まれ)は金沢宇南金里住の唐箕大工	20500124
④①	10	唐箕	長さ173、幅78、高さ133(cm)	花泉		20100227
④①	11	唐箕	長さ153、幅74、高さ126(cm)	千厩		90100654
④①	12	唐箕	縦63、横166、高さ124(cm)	一関	投入口:縦60、横49、高さ22(cm)、口部分:縦29cm、横8(cm)、出口(両側2ヶ所、縦13、横24、高さ14(cm)と縦11、横18、高さ14(cm)墨書「高部農協」、紙シールあり(中央に桜型と「静」)	10102571
④①	13	唐箕	縦74、横167、高さ139(cm)	大東	「一糧参口八口入?」墨書あり、「五百五十」	30100455
④①	14	唐箕	縦67、横107、高さ118(cm)	一関	本体木製、ドラム・落とし口・取っ手などブリキ製、網目は0.5cm角、二番口は着脱可、三番口の幅35cm、表面に墨書「理想号」、「sashinami ■■■」、「Co. Ltd. manpower」、「SASHINAMI」、「函■■回転数 70回」か、マーク「検」、裏面に墨書(表面と同じ内容3ヶ所)「前後差開自由」か、投入口(取り外し可能)に墨書「農林通産省受賞優良機」、「サシナミ式」	10100138
④①	15	唐箕	縦59、横107、高さ117(cm)	室根	「マメ、アズキ(キヨメ?)、米麦一番、米麦二番、キミ、モロコシ、ナタネアワヒエ」の文字あり	90100730
④①	16	唐箕	奥行63、幅98、高さ121(cm)	川崎	裏面に「組立■■票」の紙が貼ってある、表上部に墨書あり、表に「安野式ウチバ唐箕」「安野農具製作所製造」の墨書あり、「安野式ウチバ唐箕」、「実用商319317 327978」、「登録324811 359685」、「愛媛県越智郡小西村(商工省指定工場)」のプレートあり	90100952
④②	1	木摺臼(きずるす)	口径48、直径63、高さ109、深さ23(cm)	大東		30100468
④②	2	木摺臼(きずるす)	直径54、口径42、高さ123(cm)	室根		90100218
④②	3	木摺臼(きずるす)	上部:径59、高さ59、下部:径59、高さ99、軸径9(cm)	千厩		40200002
④②	4	木摺臼(きずるす)	全体:直径47、高さ103(cm) 上部:直径47、高さ53(cm)	東山	下部サイズは全体と同じ	50100028
④③	1	土摺臼(どずるす)	縦80、横80、高さ64(cm)	東山	臼本体 直径54cm、高さ23cm	50200125
④③	2	土摺臼(どずるす)	口径31、直径50、高さ58、深さ34、最大高63(cm)	大東	内側の土部分崩れあり	30100469
④③	3	土摺臼(どずるす)	本体:最大幅73、最大径55、高さ63、台座:長さ80、高さ10、幅10(cm)(1対)	花泉		20100126
④③	4	土摺臼(どずるす)	直径49cm、最大幅80cm、土台有高さ65cm、高さ57cm(土台無)	室根		60200282
④④	1	麦打ち台	縦61、横249、高さ16(cm)	東山	裏面内側に墨書あり(判読不能)	50200068
④④	2	麦打ち台	縦249、横87、高さ23(cm)	大東		30100449
④⑤	1	糶切り	縦60、横9、高さ25(cm)	東山	表面と側面(計3ヶ所)に焼印「「ヤマ」禎」、「専売特許 陸中殿■■■器械製造人 茂庭禎之輔」、「■■■串器」	50200073

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
④5	2、3	糧切り	縦59、横9、高さ24(cm)	東山	表面と側面(計4ヶ所)に焼印「元祖五串器」、「専売特許 陸中■■■■器■■■■ 茂庭禎之輔」、「請合」、「ヤマ」禎	50200026
④5	4	糧切り	長さ61、幅8、高さ25(cm)	室根	「陸中東岩井郡 折壁製造 藤代■■■■ 請合」の墨書あり、「上々 請合 大正七年」の刻書あり	60100288
④5	5	糧切り	縦63、横9、高さ33(cm)	室根	上部に焼印あり	60200094
④5	6	糧切り	縦61、横6、高さ23(cm)	花泉	底面に「工作 ○○(提供者氏名)」文字あり	20600009
④5	7	糧切り	縦60、横9、高さ26(cm)	川崎		70100080
④5	8	糧切り	長さ64、幅8、高さ25(cm)	花泉	木製一部鉄製「花泉ロータリークラブ歴史資料展実行委員会」のカード付属、歴史資料展に出品されたか	20200082
④6	1	自在鉤	最大長139、最大幅20、最小幅5(cm)	川崎	「奉納三山大権現祈行所」の刻書あり「■■■安全…敬白」の墨書あり、「清二右衛門」の刻書あり、その他墨書あり	70100214
④6	2	自在鉤	最大長129、最大幅33(cm)	千厩	木製	90100540
④6	3	自在鉤	縦166、横29、幅7(cm) (最短の状態)	東山	中の軸:直径3、長さ120(cm)、支柱部分:直径7、長さ134(cm)、鉤部分:長さ19(cm)	90100074
④6	4	自在鉤	長さ185、幅36、径8(cm)	室根		90100785
④6	5	自在鉤	長さ144、幅39、厚さ12(cm)、鉤(鉄製) 縦6cm、横8cm、厚さ2cm	一関	竹製、最大長さ191cm、竿(直径5cm)に木の芯(直径3cm)、竿と芯をつなぐ針金は後から付けたか	10100505
④6	6	自在鉤	縦7、横32、高さ247(cm)、竹:直径7cm、長さ213cm	花泉	鉤の長さ13cm、竹に取り付ける鎖の長さ61cm、長さ調節はできない	20600006
④6	7	自在鉤	長さ119、幅17、厚さ4(cm)	室根	鉄製	60100196
④6	8	自在鉤	最大長162、最大幅23、最小幅3(cm)	川崎		90100900
④6	9	自在鉤	最大長110、最大幅21(cm)	千厩	鉄製	90100539
④6	10	自在鉤	長さ92、幅9、厚さ3(cm)	東山		50100104
④7	1	臼	直径52、高さ46、深さ28、口径43(cm)	川崎		70100090
④7	2	臼	直径50、高さ49(cm)	一関	内寸:直径40cm、深さ24cm、虫喰い穴、ひび割れあり	10102562
④7	3	臼	直径44、高さ47(cm)	東山	内側:深さ25cm、口縁4ヶ所金属で補修	50300061
④7	4	臼	直径60、高さ52(cm)	室根		60200276
④7	5	たて杵	①直径6、長さ136、柄部分 直径4、長さ25、②直径6、長さ132(cm)、柄部分 直径4、長さ29(cm)、③直径6、長さ139、柄部分 直径4、長さ29(cm)	一関		90100284
④7	6	たて杵	長さ81、幅4、厚さ3(cm)	室根		60100391
④7	7	たて杵	直径(最大径)10、長さ94(cm)	室根		60100036
④7	8	たて杵	直径9、長さ80(cm)	室根		60100290
④7	9	横杵	縦75、横60、直径11(cm)	室根		60200182
④7	10	横杵	縦75、横53、高さ11(cm)	川崎		90100877
④7	11	石臼	全体:直径31、高さ26(cm) 上部高さ14、下部高さ12(cm)	東山		50100029
④7	12	石臼	直径36、高さ24(cm)、上部分:高さ12cm、下部分:高さ12cm、取っ手:縦23cm、横10cm	東山	取っ手は後から、表面上部にある穴の直径:6cm、臼面は6面	90100655

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
④8	1、2	千歯扱き	縦66、横81、高さ31(cm)、刃(19本) 全体 幅29cm、長さ24cm(1本幅1.4cm、長さ24cm)、刃の間1.4cm	一関	脚欠損、刃に刻印あり(判読不能)、台木に焼印(6ヶ所)「請合「カネ」小伯州 小谷性 倉吉」、「産物」、「伯州」、「正鋼 ■製所 ■請合」、「改」、墨書「下久喜 蜂谷主屋敷」、「カネ」小(以下不明)」	10100150
④8	3、4	千歯扱き	縦61、横84、高さ31(cm)、全体:幅30cm、長さ24cm(1本幅1.5cm、長さ24cm)、刃の間1.3cm	一関	脚欠損、刃(19本)、焼印(1ヶ所、判読不能)「伯州 改役所■■■」か、墨書あり「「ヤマ」ヤ」	10100158
④8	5	千歯扱き	縦66、横80、高さ31(cm)	一関	脚欠損、刃(23本)、全体:幅33cm、長さ23cm(1本幅1.3cm、長さ23cm)、刃の間1.3cm、焼印(6ヶ所、うち3ヶ所は跡のみ、判読不能、1ヶ所は菊花の模様)「本家「カネ」上ワカサ 上円製 ハヤセ」、墨書(2ヶ所)「カネ」上 若狭国産 上円■製」、「○○○(持ち主自筆か)」	10100152
④8	6	千歯扱き	縦8、横60、高さ30(cm)、刃(25本) 全体 幅33cm、長さ24cm(1本幅1.2cm、長さ24cm)、刃の間1.1cm	一関	脚欠損、台木と刃のみ、焼印(5ヶ所)「販賣人 ワカサ 「ヤマ」三川崎 ハヤセ」、「若狭名産」、「若狭正太十家 井上別製品」、墨書(2ヶ所、1ヶ所不明)「堅牢■■■ 改良一等品」	10100164
④8	7	千歯扱き	長さ30、幅61、高さ8(cm)	川崎	上部、裏面に焼印あり、歯の部分に釘書きあり	90100946
④8	8	千歯扱き	縦64、横77、高さ30(cm)	一関	脚欠損、刃(19本)、全体 幅29cm、長さ24cm(1本幅1.4cm、長さ24cm)、刃の間1.5cm、焼印(5ヶ所)「陸中「ヤマ」栄 西磐井山目町 菊地栄三郎 稲扱製造所」	90100298
④9	1	犁	全長167、幅31、高さ85(cm)、鉄製部分:全長49、幅25(cm)	花泉	畜力耕耘機	90100451
④9	2	犁	縦158、横19、高さ86(cm)	一関	本体は木製、部品は金属、刃欠損、犁へら:縦31cm、横19cm、取っ手欠損、本体の角度が調節できる、両側面に焼印(計3ヶ所)「岡山縣真庭郡八束村 岡田改良農具製造所」、「新案岡田犁 特許」	90100262
④9	3	犁	縦96、横76、高さ129(cm)	一関	本体は木製、刃欠損、犁轅欠損、犁へら:縦30cm、横21cm	90100264
④9	4	犁	長さ151、幅23、高さ90(cm)	室根		90100699
④9	5	犁	縦113、横54、高さ110(cm)	花泉	犁部分:縦38cm、横21cm、高さ10cm、柄の部分:直径5cm、長さ122cm、柄の持ち手部分がボルトによって取り付けられている	90100480
④9	6	犁	長さ142、幅52、高さ86(cm)	花泉		90100456
④9	7	犁	縦135、横56、高さ100(cm)	一関	本体は木製、部品は金属、犁先欠損、刃部分:縦22、横23(cm)、犁へら 縦21、横19(cm)	90100266
④9	8	犁	縦135、横94、高さ95(cm)	一関	本体は木製、部品は金属(金属刃2枚)、犁轅は桜の木、刃部分:縦46、横23(cm)	90100259
④9	9	犁	縦125、横85、高さ105(cm)	東山	鋤の金属部分:縦46、横23(cm)、側面に焼印「■造 ■■■郡萩荘村 佐々木金左衛門」	50200084
④9	10	犁	縦155、横52、高さ91(cm)、刃部分 縦53、横28(cm)、(刃部分に垂直方向の刃あり、縦11cm、高さ9cmの三角形)	一関	本体は木製、部品は金属、刃先は重ねている、切替ハンドルが刃の下、側面に焼印(2ヶ所)「専賣特許 ■■■■■■■ 第二七〇八号」、「石川県金沢市 ■犁製作所 ■日町」	10100018

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
④9	11	犁	縦148、横77、高さ103(cm)、刃部分 縦58、横22(cm)	一関	本体は木製、部品は金属、犁先は刃を重ねている、両側面(計5ヶ所)に焼印「登録商標「ヒシ形」山」、「特許四九七五 単纜双用■犁 松山原造発明」、「■■■■ 松山製製作所 大屋駅」、「農林省金牌 元祖松山犁 優良国産賞」	10100014
④9	12	犁	長さ159、幅62、高さ89(cm)	室根	特製、製造元 岩井郷輪 宮城県名取郡岩沼町、岩井式 足廻転双用犁、第三四七七八号	90100696
④9	13	犁	長さ155、幅75、高さ89(cm)	千厩	「東北振興」、「秋田農機株式会社 秋田市茨島」、「東北振興秋田農機株式会社」の文字あり	90100650
④9	14	犁	長さ153、幅78、高さ97(cm)	千厩	「登録 高北 商標」 「特許 高北 謹製」 「高北式双用犁」、「高北新国富號 双用犁」、「三重県名張市株式会社 高北農機製作所」の文字あり	90100653
④9	15	犁	縦148、横52、高さ109(cm)	一関	本体は木製、部品は金属、犁先の刃は二枚、刃部分 縦51、横20(cm)、取っ手片方が欠損、上面に金属製のプレートあり、判読不能、両側面に焼印(計5ヶ所)「新案特許」、「上熊本駅前 東洋社」、「日の本號 両用犁」、「弐號」	90100260
④9	16	犁(双用二段犁)	縦144、横80、高さ108(cm)	一関	本体は木製、部品は金属、刃部分 大 縦46、横19(cm)、小 縦33、横15(cm)、側面に印刷「(専賣特許)磯野式双用二段耕犁(二号)」、焼印「福岡縣博多 磯野七平製作所」、「初風号」、上面に印刷「20」か	10100001
⑤0	1	除草機	縦34、横22、高さ124(cm)	花泉	柄の部分:直径3、長さ98(cm)、金具部分:直径10、幅14(cm)	20600048
⑤0	2	除草機	高さ81、長さ120、幅37(cm)	花泉		20100103
⑤0	3	除草機	全長106、高さ87、幅36(cm)	花泉	鉄・木製、鉄部:長さ57幅16(cm)、鈴木式二三番改良除草機	20200045
⑤0	4	除草機	縦120、横39、高さ120(cm)	花泉	柄の長さ 100cm、歯の部分 縦53、横14、高さ30(cm)、柄の部分にラベル(2ヶ所)「ユニオン式和同産業株會(会)社 岩手・花巻」、歯の部分に刻印「ユニオン式」	20600049
⑤0	5	除草機	長さ140、幅27、高さ82(cm)	室根	「製作発売元 大野辨次本家」ほかの焼印あり	60100110
⑤0	6	除草機	縦135、横48、高さ74(cm)	一関	作用部(金属製):縦63、横24、高さ16(cm)、刻印「UDEKINKA」、滑走板の角度調整可、転車は2列、前の刃 縦5.5、横2(cm) 6枚×6、後ろの刃 縦6.5、横2.5(cm) 5枚×6、柄(木製) 長さ106cm、アルミ製のシール(2ヶ所)「1丁押(S)80」、「新案特許 11件 腕金貨印 水田中耕除草機 通算農林大臣賞17回受賞 鳥取県米子市浦津 太昭農工機株式会社」	10100093
⑤0	7	除草機	全長118、高さ77、最大幅60、回転部幅34(cm)	花泉	鉄・木製。「ヨネザワのカブマトリ 米沢産業株式会社 米沢市玉ノ木町」の印字あり	20200044
⑤0	8	除草機	長さ136、高さ91(cm)	室根	取手部分に「山本式」の焼印あり、上部ラベル	60100189
⑤1	1、2	箕	長さ74、幅77、高さ14(cm)	花泉	竹製	20200031

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
⑤1	3	箕	縦72、横81、高さ18(cm)	千厩		90100110
⑤1	4	箕	縦76、横96、高さ17(cm)	一関	木の枝を枠、桜の皮を糸糸に籤で編んでいる、縁は紐でかがっている	10101014
⑤1	5	箕	縦61、横64、高さ14(cm)	室根		90100778
⑤1	6	箕	縦65、横85、高さ16(cm)	一関	木を枠に桜を糸糸に籤で編んでいる、縁は紐でかがっている	10101015
⑤1	7	箕	縦77、横104、高さ17(cm)	川崎		90100955
⑤1	8	箕	縦44、横34、高11(cm)	大東		30100473
⑤2	1	足踏脱穀機	縦83、横74、高さ107(cm)	室根		60100353
⑤2	2	足踏脱穀機	縦71、横74、高さ63(cm)	大東	歯が針金の逆U字につけられている 前部の板に墨書(インク)あり「登録 佐藤式」	30100454
⑤2	3	足踏脱穀機	縦69、横67、高さ74(cm) (本体のみ)	一関	土台は木製、側面・ドラムなどは金属製、カバー用鉄枠あり。全体 縦83、横67、高さ97(cm)、ドラム部分 直径40、幅47(cm)、扱歯は逆V針金(太さ0.3cm):縦2、高さ5(cm)、10個、12列、欠損あり、枠:縦52、横60、高さ43(cm)、側面の金属に浮き文字「FUKOKUSIKI」、裏面にペンキ文字「於全國農民共連會金牌受領 農林省御推奨 TRADEMARK(マーク) 通産省御指定 富國式 シンボ号 福島須賀川町 富國社製作所」か	10100100
⑤2	4	足踏脱穀機	縦70、横70、高さ65(cm)	一関	本体は木製、ドラムなどは金属製、ドラム部分 直径46、幅44(cm)、扱歯は逆V針金(太さ0.3cm) 縦3、高さ6(cm)、9個、14列、欠損あり、裏面に印刷文字「改良稲 ■ 稲麦、扱機 山本式 千歳号 山形県天童山本商会製造(中央に力士の絵)」	10100098
⑤2	5	足踏脱穀機	縦83、横77、高さ65(cm)	大東	前部の板に焼印あり 「博覽賞金牌受領 甲號特許機械 ■ 登録商標願 完全無故 元祖 ミノル式 ■ 扱機 細王舎 工場製 ■ 川町」	30100453
⑤2	6	足踏脱穀機	縦74、横71、高さ65(cm)	室根	金牌受領、特許願元、名誉大賞、特許扱機械、品質本位、稲麦機、チヨダ式、埼玉縣川越市、木屋製造、などの文字あり	60100089
⑤2	7	足踏脱穀機	縦70、横71、高さ64(cm)、ドラム部分:直径42、幅44(cm)、歯部分(1列9個)、1個:幅3cm、高さ5cm	東山	商標の記載「農林規格 人力脱穀機 愛知県豊川市 株式会社 共栄社」、「豊年」	50300057
⑤2	8	足踏脱穀機	縦74、横73、高さ66(cm)	一関	本体木製、ドラムと金具は金属製、ドラム部分 直径41cm、幅49cm、扱歯は逆V針金(太さ0.3cm):縦3cm、高さ5cm、8個、11列、欠損あり、裏面に文字「農林省御選定 各博覽會 名誉金賞牌受領」、「島根縣八束 ■ 屋駅前」	10100102
⑤3	1	桑抜き	長さ60、幅23、高さ60(cm)	千厩	側面に「平の下」の文字あり	40101156
⑤3	2	桑切り包丁	長さ55、幅13、厚さ3(cm)	川崎		70100471
⑤3	3	桑切り機	縦51、横93、高さ51(cm)	東山	切断幅を調節可能(7段階) 最小0.2cm、最大1.5cm、正面に金属製のラベル「専賣特許 福嶋式」	50300055
⑤3	4	桑切り機	縦80、最大横133、高さ52(cm)	大東		30100375
⑤4	1	毛羽取り棒	最大長77、最大径4、柄長15、柄径3(cm)	花泉		20100408

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
54	2	毛羽取り機	縦47、横80、最大高42(cm)	大東	「登録商標 義士號 自動式 最新型 毛羽取器」などの文字あり	30100387
54	3	毛羽取り機	長さ96、幅52、高さ40(cm)	室根	両側部に「日の丸」の鋳出文字、木製部裏面に取扱説明が貼付されている	60100057
54	4	毛羽取り機	縦55、横88、高さ50(cm)	東山	台部分内側に取扱説明の紙ラベルの跡あり、ハンドル上面金属部分に文字「KATAYAMASHIKI」	50200020
55	1	糸巻台(牛首)	縦18、横51、高さ56(cm)	一関	台部分 縦18、横51、高さ15(cm) 軸 直径2.5cm、長さ(留め具まで)32cm	10100819
55	2	糸巻台(牛首)	縦26cm、横43cm、高さ59cm	川崎	糸巻枠が取りつけられたままの状態、糸巻枠に「七拾五匁」の墨書あり	70100785
55	3	座繰り機	縦35、横65、高さ54(cm)	一関	車の軸とベルトで動力を伝える、あや振り一部破損、ハンドル部分の車 直径35cm、幅2cm、糸繰りの車 直径4.5cm、幅2cm	90100139
55	4	座繰り機	縦43、横54、高さ76(cm)	川崎		70100551
55	5	座繰り器	縦29、横58、高さ53(cm)	大東	糸枠が装着した状態	30100320
55	6	座繰り機	縦40、横57、高さ71(cm)	一関	台部分:縦40、横35、高さ39(cm)、座繰り機のみ:縦12、横57、高さ35(cm)、歯車部分、大:直径12、幅2(cm)、中:直径6、幅2(cm)、小:直径5、幅2(cm)、軸の先を金属で留めている、側面に墨書「岩」	10100810
56	1	カルトン	直径30、高さ4(cm)	大東	表面に墨書「別製 「カネ」イ」、裏面にラベルあり(柿渋を塗っている)	90100183
56	2	カルトン	直径30、高さ3(cm)	一関	紙の台に布貼り、柿渋塗るか、内側に文字「「ヤマ」山」、外側裏に説明ラベル「タミヤ蠶鉢 製造発売元 田宮本店 山形県谷地町」	90100138
57	1	煙草のし	最大長62、最大幅37、最大高32(cm)	室根		90100759
57	2	煙草のし	縦61、横31、高さ32(cm)	一関	本体は木製、金属製の金具付き、葉を押さえる部分(金属製、後ろはスポンジ製) 縦11、横4(cm)、内部に取り扱い説明の紙ラベルあり(一部のみ)	90100136
58	1	縦鋸	縦89、横40、厚さ5(cm)	東山	柄部分:縦22、横5、厚さ4(cm)、刃部分を覆う木製のカバー付き 縦78、横8、厚さ2(cm)	90100203
58	2	縦鋸	長さ103、幅45、厚さ5(cm)	大東	刃:長さ85、幅38、厚さ1(cm)以下、刃カバー:長さ82、幅6、厚さ1(cm)、「近江 甲 天彦」の刻字あり	30100501
58	3	縦鋸	長さ84、幅42、厚さ1(cm)以下	花泉	元山、菅原氏が使用したもの	90100448
58	4	縦鋸	長さ91、幅43(cm)、刃厚さ1cm以下、柄:径6、長さ18(cm)	室根		90100691
58	5	横鋸	縦104、横33(cm)	一関	刃部分:長さ64cm、最大高さ1cm、柄 5cm、6cm、長さ20cm(楕円形)	10100379
58	6	横鋸	縦81、横14、刃長さ71、柄長20、柄幅13、柄厚2(cm)	千厩		90100560
59	1	炭火アイロン	縦19、横11、高さ19(cm)	室根		60100318
59	2	炭火アイロン	縦23、横10、高さ19(cm)	大東	煙突:直径5cm、中に炭あり	30100658
59	3	炭火アイロン	縦17cm、横9cm、高さ16(cm)	室根		60100380
59	4	炭火アイロン	縦18、横10、高さ17(cm)、本体:縦17、横9、高さ16(cm)、台:高さ3cm	室根	蓋の上に文字あり	90100756

		名称(標準名)	大きさ	地域	備考	資料番号
59	5	炭火アイロン	縦17、横10、高さ16(cm)	東山	取っ手は木製	50200050
59	6	電気アイロン	縦16、横10、高さ9(cm)	千厩	「千代田アイロン TSUGAWA IRON Co., LTD」の文字あり	90100552
59	7	こて	縦30cm、横5(cm)	東山	鍍部分のみ:縦9cm、横5cm	90100119
59	8	こて	長さ36、幅5、高さ8(cm)	大東		30100046
60	1	丸膳	外径37、高さ12、深さ3(cm)	大東		30100169
60	2	丸膳	直径36、高さ12(cm)	千厩		90100496
60	3	こね鉢	直径50、高さ13(cm)	一関	木製、内寸:深さ10cm、底径 26cm	90100022
60	4	弁当箱	縦32、横17、高さ13(cm)	千厩		40100171
60	5	弁当箱	縦16、横8、高さ7、深さ5(cm)	川崎		70100184
61	1	油絞	縦32、横146、高さ118(cm)	大東		30100528
61	2	油絞	長さ130、幅36、高さ114(cm)、原料投入口:口径24、深さ17(cm)	室根	右支柱に文字刻印あり、前面:文政四かのと 巳年 大工 源太夫 背面:八月吉日	90100216
62	1	川舟	長さ558、幅103、高さ30(cm)、舳幅53cm、艫幅81cm	川崎	材木店の工場で所蔵、洪水時におろして使用していた	90101142
63	1	おしらさま	全身43cm、頭部:径5、長さ8(cm)、軸:径2、長さ26(cm)	川崎		90100103
63	2	おしらさま	全身47cm、軸:径2、長さ26(cm)	川崎	両目と口の削りあり	90100104

(2)教科書との対応

令和3年度に市内で使用されている教科書と収蔵資料、民俗資料館展示の対応関係を示した。

収蔵資料	民俗資料館展示	教科書での取り上げ		
 <p>【昔の農具】 鎌、鍬、桶、箕、石臼、千歯こき、臼、唐箕</p>	 <p>農家の四季 一日の暮らし(道具のタイムマシーン)</p>	小3	社会	かわる道具とくらし
		小3	国語	もちもちの木
		小6	社会	江戸時代
 <p>【昔の仕事の道具】 糸車、びく、すげ笠、ど、火縄銃</p>	 <p>山辺と川辺のくらし</p>	小1	国語	たぬきの糸車
		小4	国語	ごんぎつね
		中学	英語	Gon, the Little Fox

収蔵資料	民俗資料館展示	教科書での取り上げ		
 <p>【昔の生活道具】 みの、かよいとつくり、手回し洗濯機、機織り機、おひつ、わっぱ、丸膳</p>	 <p>一日の暮らし</p>	小4	国語	ごんぎつね
		小4	社会	ごみ問題
		小5	国語	大造じいさんとガン
		中学	家庭分野	持続可能な社会 着物 伝統的住居
		中学	技術分野	技術と生活・産業
		中学	美術	伝統的な技・技術・工芸 受け継ぐ伝統と文化 材料を知ろう(木)
	 <p>一年の暮らしと行事 はやき、果報だんごの展示</p>	中学	家庭分野	郷土食

収蔵資料	民俗資料館展示	教科書での取り上げ	
 <p data-bbox="290 806 516 852">【戦争中の暮らしの道具】 防空頭巾、足踏みミシン</p>	 <p data-bbox="753 831 899 852">戦争中の暮らし</p>	小3	国語 ちいちゃんのかげおくり
 <p data-bbox="308 1692 498 1736">【郷土の芸能の道具】 神楽面、神楽用鈴</p>	 <p data-bbox="715 1692 937 1736">暮らしの楽しみ 市内の民俗芸能の所在</p>	小4	社会 地域で受けつがれてきたもの(祭り)
		小6	国語 古典芸能の世界
		中学	国語 本で世界を広げよう 日本文化
		中学	地理 地域に根ざした豊かな文化
		中学	社会科 各地方の特色のある祭り・行事
		中学	音楽 郷土の祭りや芸能
		中学	美術 祭の造形

◆参考文献

阿部正瑩 『巖美地方の民俗資料』 1985 阿部正瑩
 一関市史編纂委員会 『一関市史第三巻各編2』 1977 一関市
 興田史談会 『興田史談』 1991
 興田史談会 『ふるさとの歴史興田史談』 2016
 川井村文化財調査委員会 『川井村民俗誌 民具編』 2000 川井村教育委員会
 猿沢地区老人会歳時記編纂委員会 『おれたちの若いころ 猿沢の稲作』 1993
 猿沢地区老人会歳時記編纂委員会 『おれたちの若いころ 猿沢の葉たばこ・養蚕』 1993
 東京農業大学「食と農」の博物館 『耕す 鋤と犁』 2013 東京農業大学出版
 東山たばこ記念史編集委員会編 『東山たばこ記念史』 1991 東山たばこ耕作組合
 中里地区民俗資料保存会 『中里村史』 1988
 萩荘文化協会・萩荘史編さん委員会 『萩荘史』 1991
 文化庁文化財保護課監修 『日本民俗資料事典』 1969 第一法規出版
 松本博明編 『一関市巖美町本寺の民俗 骨寺荘園遺跡のくらし』 2011 一関市
 宮本馨太郎編 『図録・民具入門事典』 1994 柏書房
 横浜市歴史博物館編 『千歯扱き 倉吉・若狭・横浜』 2013 横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団

岩手県一関市文化財調査報告書第9集
一関市民俗資料調査報告書

発行	令和4年3月
発行・編集	一関市教育委員会 〒021-8503 岩手県一関市竹山町7-5 電話 0191-26-0820
印刷	川嶋印刷株式会社 〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21 電話 0191-46-4161(代)